

平成27年（西暦2015年）12月

瞑想録（その10）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。私のライフワークは、狭い意味では連続体の神秘をアニミズム的多神教で瞑想する、「連続体と蓋然論理」です。最近ではより広範に、「人間とは何か、自分とは、そして宇宙とは」と言う観点を、科学ではなくまた学問でもなく、専ら瞑想で追い求めています。そのためのキーワードは「素朴な疑問」と「意外な気付き」です。つまり真の知恵について瞑想しています。瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明やトンデモと言われそうな見解も含まれていますが、世の中科学で証明された決まりきったことだけではつまらないでしょう。私自身、「つまらない事実よりも出来の良い冗談の方が面白い」と言う立場で居ます。ですから、あくまでも新提案部分を肯定的に拾ってあげるつもりで見てください。その上で本文の言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。私は死後の世界に恐れはないですし墓も要らないのですが、あたかも墓誌銘には、“He loved freedom. He meditated for interest. And he lived a pleasant life.”と書いてほしいと願っています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2015. 11. 03

1、日本人の独創性

今年も2人もの日本人がノーベル賞を取った。これまでの総数で24個、個数順位で世界第7位と、アジアではダントツ1位である。しかしつらつら振り返るところ、日本のように世間体第一主義で横並び最優先のおよそ独創性とは正反対の土壤の国で、独創性が最大の評価基準であるノーベル賞をどうしてこれほどたくさん取れるのであろうか。正直不思議である。本日はこの点について瞑想してみた。

第1の理由として思いついたのは、「和魂洋才」と言う明治以来の伝統である。事物の矛盾を気にせずに、清濁併せ飲める、一種の割り切りである。これが、「日々の生活では他人の目を気にするが、こと技術では別人格になれる」と言うことに繋がって、独創性の存在する空間があるのだ。そしてこの和魂洋才は歴史的にはより昔に遡れる。

神仏習合の流れが先行して存在し、この更に前には中国と言う当時は大国で先進国の、海を隔てた周辺国と言う立場にあつて、現実的に行動しようとした先人たちの知恵と地政学があつた。

そして第2の理由だが、やはり現実的に行動する原理から派生しているのだが、どんなイデオロギーにも支配されない柔軟な国民性がある。例えばキリスト教とか共産主義とかそういった単一のイデオロギーに凝り固まっているとそれに沿った考え方しかできなくなるし、しばしば許されないが、日本は典型的なアニミズムの多神教国であり、多様性に富んでいるところが、他の人には気付かないところに気付けると言う独創性となって表れた形だ。

ところでイデオロギーに固まっていると独創性が出ないとするならば、どうして米国やロシアを始め一神教の欧米諸国にノーベル賞受賞者が多いのであろうか。今度はそういった素朴な疑問の出番となる。答えから先に言えば、その第1は狩猟民族特有の横並びの無さ、そして第2にユダヤ人の影響と言うことになるだろう。もちろん大元には、科学技術は多分にキリスト教合理主義の焼き直しであつて相性が良いと言う事情があるが。

ユダヤ教そのものは、立法主義に凝り固まった極めて融通の無い硬直的な宗教である。だがそこには同時に国土を失った弱小民族ゆえの、歴史に翻弄されつつしたたかに生き残った超現実的な生き方がある。これらを矛盾とも思わず両立させていて、その彼らの超現実的な生き方が、契約主義と言った商習慣技術とともに新興国の米国に、あるいは高々千年弱の歴史しか持たないロシアに、しばしば嫌われつつも吸収されていった形となっている。国別はともかくノーベル賞受賞者に占めるユダヤ人の割合は高い。これらの融通性がイデオロギーの呪縛に、今のところ打ち勝っている形だ。

では再び日本に返って、なぜ日本のように神仏習合と言う、イデオロギーと正反対の融通満載の背骨がありながら、一般人のマインドは変に世間体と横並び一辺倒で余りにも愚かなのであろうか。それは第1に、農業民族として同じ季節に協力して同じことをするという習慣が定着していること、そして第2に、基本の宗教が欧米の一神教よりもはるかに高くて繊細なアニミズムの多神教であることに依る。

悟りとか靈魂とか、理屈でない分だけ教えは高く、悟りに至るには高度な気付きと知恵を要して、およそ機械の到達できる境地ではない。だが皮肉なことにそれ故に、大多数を占める普通の一般人の理解を越えている。そのために大部分の一般人は、単

に表面上の形をまねることに留まっている。これが、日本が世間体第一の個人の自由の無い低級な社会に留まっている理由である。

日本もこれから近未来に向けて、和魂洋才を堅持しつつ世界標準を取り込もうとしている時に、果たして和魂洋才と世界標準が相互作用して長所が伸びる方向に向かうのか、あるいは潰し合ってつまらない国になってしまうのか、今はちょっと予測ができない位置にある。今後の人々の持つて生き方次第であろう。これからの人々の生き生きとした創意工夫に期待したい。

実は過去にそう言った種類の実績がある。江戸時代に江戸の町は、当時の人は気付いていなかったが、人口が世界最大の大都市であった。それにもかかわらず貧民街ができる訳でもなく反乱が勃発する訳でもなく、秩序が崩れずに都市としての体裁を保ってきた。これは今の人々が思っている以上に偉大な成果である。今世紀後半にはメキシコシティやアフリカの大都市の人口が最大になると言われているが、これらの都市は早くももう、都市の規律を失っているではないか。

日本の江戸時代は鎖国と言う特殊状況に合って、これに負けるどころかかえってその閉鎖系を生かして、江戸文化と言う世界にまれな伝奇文化、独創性の高い爛熟文化を醸し出した。文学にも芸術にもそれは見える。例えば南総里見八犬伝に見る場面のめくるめく移り変わり、あるいは登場人物のことごとく数奇な運命、これらを思いっただけでも称賛に値する。そしてこれらの成果が、単に作者個人の得意な能力に依存していたと言うよりは民族全体のDNAであった証拠に、これらの奇想天外な場面展開は今のゲームのRPGの場面展開に生きていて、日本文化の世界発信の原動力に繋がっているのだ。

つまり日本が世界に飲み込まれるのではなく、日本が世界をのみ込めば良い。そのためには第1に、日本が世界標準からずれているからと言って、理解促進してもらうための努力はするが徒に西洋かぶれしないこと、そして第2に日本人が日本の良さにもっと気付くことが重要だ。文化としては既に繊細かつ絢爛豪華で他を抜きん出ているので、理解さえしてもらえば良い。そして理解周知を達成できたときに、ブーメラン効果でほかならぬ日本人自身の独創性も更に高まるであろう。

2、コンスイ

私は郊外のマンションに住んでいる。嫁1人娘1人の3人家族だ。嫁さまのことはウシ君、娘のことはトリ君と呼んでいる。まあどこにでも居るような、可もなく不可もない、

標準的なありふれた一家だ。それでも一応、とりえもない私のところにやって来てくれたウシ君とトリ君を大切にしているし、彼女らもなついている感じだ。時には口げんかもするが。

ところで私は仕事であるいは私用で、たまに虎ノ門に行くのだが、虎ノ門のある一角、とある神社の入ったビル街付近に近づくと、なぜかふと不安なしかしデジャビュ的な体験に襲われる。かつて来てビルの中に入ったことがあるような、しかもそれが必ずしも幸福な体験でなかったような、そんな感じである。しかもその「感じ」は現実には留まらない。夢でもたまに、同様の景色が出てきて同様の言い知れない不安感を持つのだ。その不安感にあたかも、大手術のための全身麻酔を待っているかのような不安感である。トラノモン、それはまじないの文句のようだ。

更に、似たような不安感を別の夢でも持つのだ。その夢の舞台はいつも決まってかつて居た大学の研究室、長い廊下に無機質のドアが並んでいると言った風景だ。その情景の中で誰と会う訳でもないのに、やはり似たようなデジャビュの不安感がやってくる。正確に言えば、その建物はかつて私が所属した研究室であるので、デジャビュでなく本当に既視なのだ。ちなみに私は出来の良いいあるいはやる気に満ちた研究生ではなかった。

こう言った体験を数度重ねるうちに、私は薄々と気付いてきた。私は実はある時に事故に遭い、そして虎ノ門にある病院に緊急搬送され、そして昏睡状態にあるのだ。研究室の情景とは実はその搬送された病院の、病室のドアが並ぶ情景が仮託されているのだ。そして私はその病院の医師の懸命な努力によってかろうじて命を取り留め、たまに昏睡から醒めそうになる。そしてベッドの脇ではそっちの世界の本来の嫁さまが、私を昏睡から醒めさせようと呼びかけているのだ。

私はおそらくこのタイミングに於いて、昏睡から醒めようとすれば醒められるのであろう。だが一度醒めてしまえば今「これが現実だ」と思って送っている人生、ウシ君とトリ君との3人暮らしの小さな幸せは、これは実は昏睡状態の私の無意識の産物であって現実ではないので、一度目をさましてしまうとウシ君ともトリ君とも永遠にお別れだ。もしかしたら付き添っている方の嫁さまとの人生の方が、よっぽど幸せかもしれない。ご近所様とのトラブルも、社畜人生も皆お別れできるかもしれない。それでもなお、私はウシ君やトリ君との小さな幸せの方が、何事にも代え難く思うのだ。もうウシ君とは30年の付き合いだが、それだって単に夢で思う長さであって、実際の昏睡はもっと短く1月程度なのかもしれない。

こうして一時の不安感、言い換えれば昏睡から醒めるかもしれないチャンス、ふと正気に帰って彼岸から此岸に戻るチャンス、献身的な本当の嫁さまと再会するチャンスを、私は何度か潰してきた。そのチャンスのキーワードが、トラノモンでありコンスイなのだ。そのチャンスは予期せぬ時にふとやってくる。

人は皆現実を生きている。そしてその現実には嬉しいことも悲しいことも、つらいことも楽しいことも色々あって、人によっては「出来れば別の人生をしたい」と思っている人も多い。だがこれらすべての人々がある意味選択肢なしに暮らしている現実、これは実はポジネガの関係であって、皆コンスイの一時の夢の中に居て、本当の人生は昏睡から醒めることによってやってくるのだ。そしてその醒めた彼岸こそ、人々が無意識に気付いている理想郷かもしれない。そして多くの人はこれに気付いていない。

人は誰でもいずれ死ぬ。この死、これは実は昏睡から醒める瞬間であるのかもしれない。人が永遠に寝て居られないように、永遠のコンスイもないのだ。そして醒めて向こう側の現実世界に渡った時に、人はおそらくそれまでのコンスイの夢を懐かしく思い出すのだろう。そして80年もの長い人生が、実はわずか1月ほどの昏睡に過ぎなかったのに気付く、本来の嫁さまと、嫁さまと言うシステムがあるのかも分からないが、時間や空間の概念すらあるのか分からないが、まああっちの世界での記憶を取り戻して、それなりにやって行くのだろう。そしてまたその彼岸も、より上位の夢の一部だったりするのかもしれないし、今見る夢が下位の長い人生の集約だったりするのかもしれないが。

だったら今のちょっと良い平凡な夢を、少しでも長く見ようとしたって、そんなにバカらしい貧乏くじの行為だとは思えないのだ。コンスイにハレルヤ。トラノモンには行かない。身丈に合った「足りることを知る」凡庸な人生に万歳！

3、アナログコンピューター

私が学生だった頃、図形や画像のデジタル認識の研究が、結構流行りの分野だった。時代的にはちょうどパソコンがウインドウズを採用して普及した頃で、その程度の処理能力のマシンにはちょうど適切なテーマであったこともある。そのころに計算機解析で主流だった分野は、流体、構造、電磁場等の場の物理量の解析であったが、そう言う「硬い数値解析」とは別に、図形や画像と言うアナログの言わば「柔らかい数値解析」ができないかと言う研究期待は、結構高かった。実用的にも例えば、今は人がやっている「リンゴの木から実を見出して機械で自動的にもいで行く」と言った作業の自動化ができることになり、実用的にも価値があった。

私が研究室に在籍した当時は、この分野の研究が始まったばかりと言うこともあって、写真で撮った2次元画像に、ガウシアンとかラプラシアンと呼ばれるデジタルフィルタ—演算子を作用させて、物と物との境界線や、テクスチャーの違うゾーンを見出すと言った方法が主であり、その成果も実用にはまだ程遠いものだった。特に3次元的な行為、例えば飛行機がビルの向こうに姿を消すとか、葉っぱの向こうに半分隠れた実を検出するとか、そういう行為が不得手だったし、何らかの境界線を見出してもそれが何であるかの認識などおおよそできなかった。私自身はその後この分野を追いかけていないので技術の進展をつぶさには知らないし、イメージセンサー技術も発達してはいるが、「自動実もぎ機」が出来たと言う話は聞かない。

この研究を元に我々の認識過程をつぶさに見てみよう。すると、アナログ認識に長じた我々人間ですら、ベタの画像を元にそこから境界線やテクスチャーの違いを見出すという行為は、通常やっていない。どうやって認識しているかというと、先ず対象となっている画像の全体観を見て、それがおおよそどの分野に当たっているかを蓋然的に認識することから始める。必要ならば見る角度を変える等して、複数の画像を取って、全体観を補強する。

こうして大まかな分野が分かったら、続いてその分野あるいは近い分野の、これまでに得た認識パターンや法則等を想起して、それらの既得のパターンや法則を対象画像に当てはめてなお深く、その様相を観察する。以上のプロセスを繰り返すことにより必要な細かさで、対象物の認識に至る。その際、推測はあくまでも蓋然的だから勘違いもあり得るが、その場合は一旦元に戻ってみる等の試行錯誤を繰り返す。

ここで注意して欲しいのは、西洋風のチューリングに代表される情報理論では、1枚の画像から得る情報は「1回で全部」であって、見るたびに情報が増えるということはない。同じ本を何回も読んで「葦編三絶」と言うことは無いのである。こう言う西洋哲学の常識があるいは無意識に、デジタル形状認識の研究にも影を落としているのかもしれないが、実際の情報は閉じた系の内側に居ても、過去の経験則の付加等により増加するのだ。

もう一つ気をつけたい点がある。「認識行為が過去に得たパターンの当てはめ」、これは文系の心理学では昔から言われてきたことであるが、人の認識行為が単に当てはめのみならば、新たなパターンや法則を獲得することは無いことになり、経験や学習の効果も積み重ねも意味がないことになる。だが実際は異なっている。これは人が最初は本能に、そして段々と経験に依って、似た複数の状況を「同じである」とまとめる

能力、つまりパターンを蓋然的に自己発見して自らに追加すると言う、極めて創造的な行為を行っていると言うことだ。

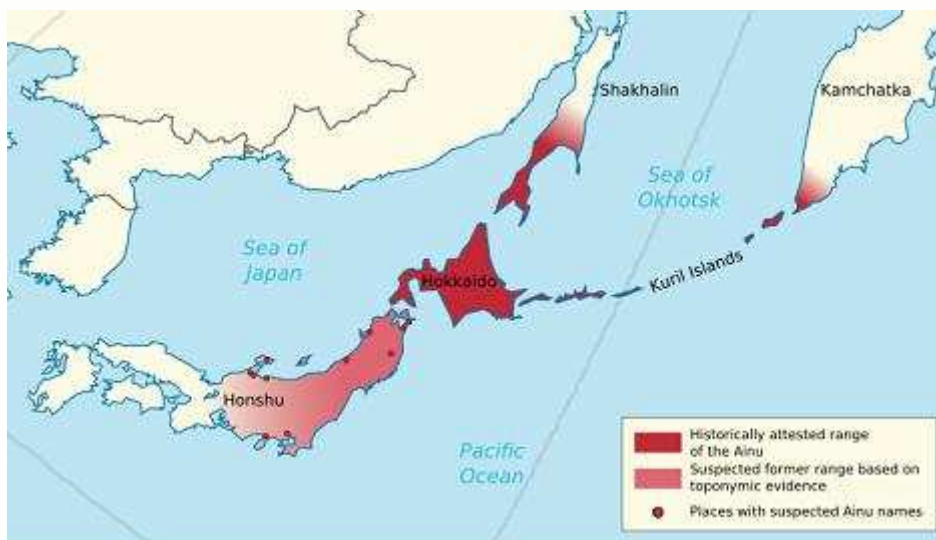
西洋哲学は一般に良くも悪くも、物事をありのままに受け取ろうとせずに、「徒に単純化して上澄みの使えるところだけ頂こう」と言う人工的な態度が強い。この調子良さゆえに数理科学と言う架空の科学が発達し、システム論への偏重から武器を大量生産出来たし戦争をゲーム化できた。こうして結果的にアジア諸国を植民地支配するに至った。だがこの曲がった情報認識は、過ぎ去った20世紀の遺物だ。

21世紀は東洋の時代であり、ありのままに受け取る時代であり、内省の時代である。これらの内省に依る現実的なパターン認識過程を鑑みると、そのパターンは図形に限らないことも強調したい。例えば敵攻撃の戦略の立案と言った高度に抽象的な考察や発見の過程も基本的には同じなのだ。場面同定とパターン創成、この2つの行為は何らかの形で、現実的には人のアナログ能力の介在によって実行させないと、およそ非自明でトートロジ的でない、有効な認識や考察や推論は出来ない。

CADとかCAMとか、“computer aided”が一時ずいぶんと流行ったが、実用的な推論認識のためにはむしろHA、つまり“human aided”がどうしても必要になるだろうと思われる。このアナログ行為を機械的にやらせようとするならば、どうしてもアナログコンピュータが必要で、しかもそれは人と同様に必然的に個性があるので、大量生産には限界があって基本的なところは一品生産になり、その値段も能力によって変わることになる。

4、アイヌとアテルイ

日本の特に東北地方には、古来アイヌ民族が住んでいた。狩猟を中心とするアニミズム信仰の人々で、部族単位の集団生活をしていたと言われている。そしてアイヌの居住地は、今の日本つまり東北や北海道に限らずに、もちろん方言程度の違いはあるものの、樺太や千島、さらには樺太や沿海州にも分布していて、そちらの方で靺鞨（まつかつ）や肅慎（みしはせ）と言ったツングース系の人々と接して、交易もしていたと言われている。



アイヌの人々は従来から、主として形質学的分類に依り、むしろ九州の熊襲（くまそ）等の人々と近いのではないかとされていた。一種のスプロール現象である。この点は、最近のDNA分析でも裏付けられつつある。DNA分析によると、アイヌや熊襲等の人々は「古モンゴロイド系」に分類され、まだ日本が大陸と陸続きであった2万年くらい前に日本に移住してきた民族だと言われている。

そしてその薄く広い分布の上に、4千年くらい前から「新モンゴロイド」と言われる人々が、稲作と鉄器と馬術と言う近代文明を携えて渡って来て、その高度な文明に依り支配階級となり数も増えていった。ちなみに古モンゴロイドとしては、チベット人とも親近性が高いことが知られている。なぜ彼らが共通かと言うと、彼らは狩猟や牧畜を主とするために山谷のような「辺境」の地に居住していたために、農耕を主とし平野を好む新モンゴロイドにとって代われなかった点が挙げられる。

古モンゴロイドと新モンゴロイドのプロトタイプは下図のようで、古モンゴロイドの方が丸顔で毛深く、新モンゴロイドの方が面長で毛が薄いと言われている。ただし現在では混血が進んでいて、このようなプロトタイプでは見分けができず、究極的には「自分のことをアイヌだと認識している人々がアイヌ人」とするのが適切である。ただ、旧貴族階級に弥生人型の顔つきの人が多いのは目に付く。



ではそのアイヌの人々はなぜ段々に北方に追いやられていったのか。そう言う行為が始まったのは大和朝廷が中央集権化した5～6世紀ごろに始まり、奈良時代から平安時代初期に著しい。このころは文献が少ない時代であるが、日本書記の最後の部分に多少の記述が見え始め、多くの記述は続日本紀や風土記等に残されている。但しあくまでもヤマト側から見た記述である。そして平安初期の征夷大將軍の坂上田村麻呂が特に突出して知られているために、あたかも「和人はアイヌを一撃で撃滅させた」かに見えてしまう。

だが実際は交易に始まり、稲作の伝播や仏教の伝播もあり、また平和裏の定住と和民化も多く、戦闘中心と言う訳でもなければ和人が連戦連勝だった訳でもなかった。また当時の東北は、「この線から先はアイヌの地」と単純に仕切られるものでなく、和人とアイヌがさもフラクタルのように交互しながらあるいは飛び地的に領地を占めていた。この辺の経緯は、米国の原住民いわゆるインディアンと征服民である欧州系とのやりとりと似ているところもある。

ただ結果として、和人とアイヌは拮抗並行していた訳ではなく、全般的に和人が支配地を広げていく歴史であった。そしてここには2つの要因が見て取れる。第1に文化の落差である。どうしても文明の高い方が攻めても勝ちやすいし、そう言う高い文化へのあこがれから自ら和人化する傾向もあった。そして第2に大和朝廷の拡張的性格である。大和朝廷が近畿地方に出来て以来、周辺民族は次々と彼らに従っていったが、それはアイヌだけでなく、出雲の国譲りもあるし関東東海地方も豪族がいつの間にか大和化して古墳を誇るようになっていった歴史がある。また、文化の高低であるが、

本来は「アニミズムだから低い」と言うことは無いのであるが、ここは生産性や武器の強さの意味で言及している。

ではなぜヤマトがこれほどに拡張的であったのだろうか。そもそも拡張的性格があったからひたすら支配地域を広げていったのであり、もしなければより拡張性の高い民族に吸収されていたのであろうが、ここはやはり文化の差が大きいであろう。ヤマトには記紀神話と言う精巧な民族神話と、稲作や鉄器と言った固有文化、それに当時先進だった中国の諸制度や文化を取り入れようとする先取の精神があった。これらが全体としてヤマトを、拡大に意欲的な、好戦的征服的な民族としたのであろう。

ところで奈良時代に最も高揚して平安初期にほぼ目的を達成した、ヤマトによるアイヌの臣民化であるが、先ず、寒冷の地である東北地方をヤマトはなぜ執拗に欲したのであろうか。接触の最初はおそらく船による交易だったであろう。このころでも陸地よりは海上交通の方が普遍的であったのは、ヤマトタケルが進んだ古東海道が今と違って相模から安房に船で抜ける道であったことにも如実に表れている。船による交易で和人はアイヌから、昆布や海産物等を始めとする山海珍味を得ていた。だがその内に金鉱と砂鉄が見つかり更に良い馬を生産することが分かり、その現世利益は決定的になった。また、当時のヤマト朝廷は、現在の沿海州に勃興した渤海と定期的交流を持っており、東北はその渤海への窓口でもあった。

奈良時代にヤマトのアイヌに対する姿勢は、交易から次第に攻撃に移っていく。と言っても最初のうちはヤマトの連戦連敗であった。ヤマトは大人数の農民の徴用による大軍で攻めたが、所詮は寄せ集め部隊であり、地の利を知るアイヌの人々の遊撃戦に勝てなかった。ただアイヌの方も部族単位で民族全体としてのまとまりは薄いと言う弱点はあった。こうして奈良時代は終わり平安遷都になると、桓武天皇は平安京の威信を内外に示すためにも、アイヌ攻略に力を入れることとなり、猛将の坂上田村麻呂に大軍をつけて送った。

そしてそれ以前からヤマトを駆逐し最後に田村麻呂と対峙したのが、アイヌの英雄のアテルイである。アテルイについては高橋克彦さんの小説もあり、この小説を元に2年前に大沢たかおさん主演でNHKの連続番組として放映されたので、知っている人も多いと思う。アイヌ部族をまとめて大連合を作り、ヤマトの理不尽な征服戦略に立ち向かった懐の深い人物である。ただアイヌは文字を持たなかったので、アテルイに関する記述は少ない上に、すべてヤマト側からの視点である。ここに素朴に暮らす人々の現代の世界標準における構造的不利がある。なお高橋さんの小説も、史実よりも多分に当時の文化を元にしたエピソードを挿入してある。

ただアテルイで不思議なのは、20年にもわたってヤマトと対峙してきたアテルイが、どうも田村麻呂とはあまり戦わずに、余裕のあるうちに投降していることだ。この点には色々な説があって、アイヌが長い戦いで相当に消耗していたとか、裏切り者が居て調略されたとか、果ては田村麻呂の人物に感じ入ったとの説もある。いずれにしろこの2英雄の対峙は、従来史では田村麻呂の圧勝のように書かれているが、実際は命を覚悟で投降したアテルイの方がよっぽど器が大きいと思う。そしてアテルイは都に移送され、田村麻呂は朝廷に彼の命乞いを上奏したが、受け入れられずにアテルイ達は斬刑に処せられてしまう。ヤマト中央の政争に巻き込まれた形である。

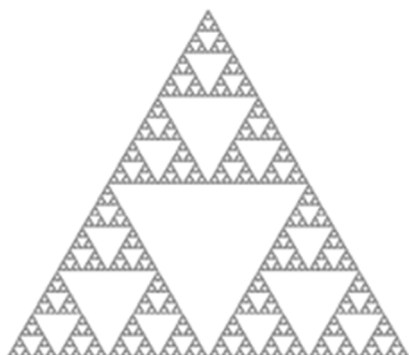
アイヌと和人の交流、これには難しい過去があるが、我々は一方的な皇国史観にイデオロギー的に流されることなく、自らの立場に於いて雄々しく立ちあがったアテルイやシャクシャインと言った人々を、敵ながらあっぱれと誉める余裕を持ちたいものだ。ちなみに帰朝後田村麻呂は清水寺を勧請したが、その敷地内にはアテルイの顕彰碑が立っている。

（注：新野直吉著「田村麻呂と阿豆流為」も参照しました）

5、イレギュラー

先日の「アイヌとアテルイ」の記事でも記したように、奈良時代や平安時代の東北に於いて和人とアイヌは、とある軍事境界線をはさんで南北にきれいに2分されていた訳ではなく、入り乱れてあるいは縞模様には混住しつつ遷移していたことが知られている。同様なことは旧ユーゴスラビアもそうで、セルビア人、クロアチア人、モスLEM人が言わばまだら模様に混住しているために国境線が引きにくく、一旦引いてもまたその小さな混住域内での争いが永遠に絶えない。

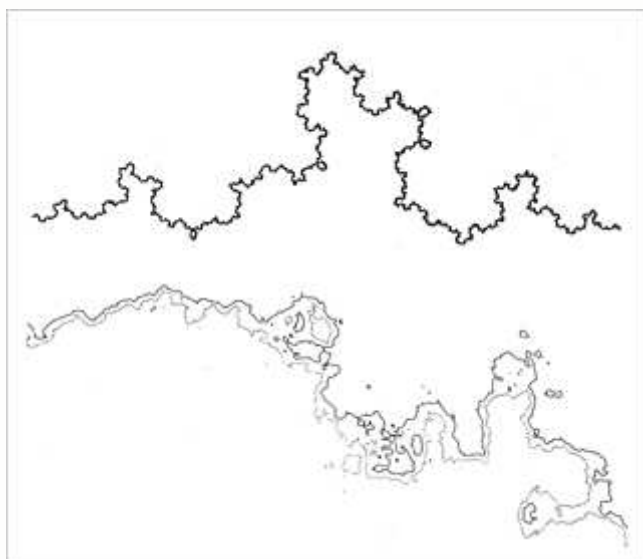
こう言う大の中に小さな相似形が混在している形を、数学ではフラクタルと呼んでいる。代表的なのがシェルピンスキーのギャスケットで、正三角形の入れ子構造になっている(下図)。



これは下図のように相似形を永遠に繰り返す形で描いている。



現実の例としては海岸線が良く例えられて、大きく見ると波打つ構造のその部分を拡大してみるとまた波打つ構造になっている。



実際に人や動植物の混住をフラクタル理論で解析して、そのフラクタル次元を求めたような諸研究が、それも理数系でなく人文系の研究者による研究論文が、結構ある。

ただこう言う解析は、理論ごっこあるいは理数系の純粋研究としては面白いかもしれないが、現実をどれだけ忠実に反映しているかと言えば、そこにはかなり強引な理想化や単純化、非現実化がある。数理科学に乗るためには何らかの相似構造(群)がどうしても必要であるところ、実際の混住や海岸線が部分相似になるなどと言う調子

の良いことは、およそありえないからだ。「人文科学の基本はイレギュラーだ」と断定しても良い程である。だから人文科学ではフラクタルは勿論、「まとめる」とか「統一する」と言う行為が一般的に嫌われていて、いきおい学問と言っても事実をただ淡々と記述すると言うやり方が推奨される。まとめると言うことはイレギュラーの角を削ることであり、角を削ることは正確さを外す行為で、学問としてあるまじきことだからだ。

私は最近、個人的に尊敬している役行者（えんのぎょうじゃ）に関する論文的著作を読んだ（宮家準著「役行者と修験道の歴史」）。役行者は飛鳥時代に実在した人物で、現在の修験道（山伏、行者）の開祖とされているが、時代が古いためかなり伝説化されている、その意味ではヤマトタケルのような人物だ。そしてこの学術本の記述法は徹底して羅列書きで、「役行者を一言で言うと」と言うような、忙しい現代人に概要を端的に要約して伝えるウィキペディアのようなスタイルとは程遠かった。

「文献Aではこう書かれ、文献Bではこう書かれ…」のただただのオンパレードなのだ。その200ページもの記載を忠実に読んで行けば、開祖の常ではあるものの奇跡物語が時代とともに付加されていく様子が読み取れるのだが、その本の著者はそれについてのまとめの言及は一切せず、あたかも「典拠のある事実以外は読者が勝手に悟れ」と言わんばかりである。根が理系出身者の私にはもどかしいことこの上なかった。立場の違いとは言え文理の常識の違いの典型を見るようであった。

先の混住の例や世界地図上の国の分布から明らかなように、この世の現実には「厳密な規則性」などあったらそれは間違っている。むしろ文系の研究者から見れば、その規則から外れたイレギュラーなところにこそ、学問のだいご味があるのだ。例えば世界地図を見て、これも広い意味では応用フラクタルなのだが、約200ある国の立ち位置、具体的には位置や大きさや形等を認識するのに、何らかの法則は無くただただ覚えないと、仮にそれが無味乾燥であるとしても地理を専攻したことにならない。そして覚え始めは無味乾燥であっても、そこに歴史や交易と言った経系が通ると、むしろその不規則な出入りこそが妙味になってくる。

そもそも人の知識体系も多分にイレギュラーなフラクタルだ。例えば北海道について「知っている」と言ったとき、どれだけ深く知っていれば「知っている」と言えるのだろうか。「だいたいダイヤモンドの地形だ」くらいは小学生でも知っている。更に渡島半島や知床半島も知っているともっと知っているが、だが襟裳岬や静内まで知っている人、更には明治開拓史やアイヌの文化や山海珍味の種類まで細かく知っている人に比べれば、まだ知らない。こうして極限にまで至れば、住民一人ひとりの日々日常まで知らないと専門家と自称できなくなってしまう。

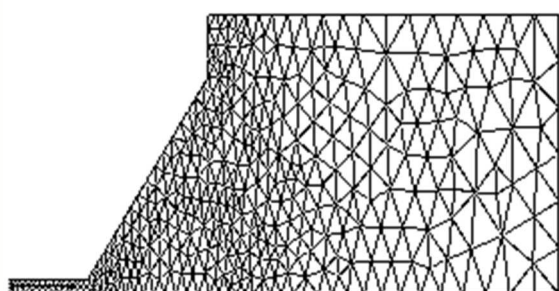
私も先に書いたように理系出身ではあるが、趣味のウォーキングでもむしろそのイレギュラーさ加減、つまり予期しないところに意外な記念物があったり、あるいは無関係だと思っていた別々の史跡の間に実は微妙な関係があったりすることが面白いのであって、もしこれが実は厳密なフラクタルや法則であったなら、行くまでもなく先が見えてしまって、物理学の統一理論が大好きな私にとってすら、つまらないことこの上なくなってしまう。釣りだって趣味ならいつ釣れるか分からないから面白いし、逆に商売としての釣りなら面白くなくても良いから少ない手間ですっさと釣れて欲しいだろう。

ということになると私の中にある2つの相反する嗜好、つまり相対論や量子力学のような統一理論を愛しながらも他方で各論的イレギュラーさに妙味を感じる私の好みは、一体どうなっているのだろうか。世界地図に何らかの数字もどきが付加出来れば覚えるにも無味乾燥でなくて面白いと感じつつ、他方でそのような規則性があつたら先が見えてしまって味気ないし白けるだろうと感じる自分は、一体どっちを求めているのか。

答えとしてはおそらく両方を求めているのであろう。物の見方は多くあつた方が面白く、仮にそれらが矛盾しても単に多面体に対する見方の相違に過ぎないのだ。強いてまとめれば、現実のイレギュラーの妙味、これは無味乾燥の丸暗記ではなくて、数字にはならない代わりに縦色と横系の織り成す布模様の妙味である。そしてこの模様の最も抽象化された極限としての幾何学的な場合、これが統一理論に当たるのだ。だから統一理論とイレギュラーを同時に求めることは矛盾しない。むしろ共生関係にあるとすら言える。

この観点からは私の知識欲の根源的態度である、「興味あることをその論理関係を無視して単に興味がある順に知りたい」と言う欲望も、まんざら荒唐無稽とは言えなくなる。現代標準では一般に、ある特定の専門を修めることが一番立派であるとされており、そういう人たちのところに勲章が行くのだが、自らを規制統制されたくない私が一見青臭く乱読し乱れ瞑想をしても、そこに心さえあればいずれ縦横と横糸が通されて有機的に繋がるのだ。そう言う予想があるからこそ、現在興味の行くままに瞑想しているということになる。そしてこのブログの各記事をいつも2千字程度で切り上げるという強引さも、知識が深さは言い始めれば底なしだと言う本質と、人の能力や時間は特に多忙な現代人には限られていると言う本質の、二項対立解消の解決法として、多くの人々に了解してもらえと考えている。

更にまとめれば、アナログ数字のようなものがあるとすれば、それは先が見えてはいけない。なお、「真実は1つ」であるはずなのに立場による違いが存在するのも、必要悪とか人の能力の限界と言うよりも、①アナログの視点では事物は常に多面的である、②人の想像的能力は人を事実のみに限定せず特に芸術に見るように架空への想像力こそが人の真骨頂である、との理由に依っている。追記すると、世界地図に数字が当てられないもどかしさは理工学でも、例えば有限要素法(FEM)の非構造解析格子とそのアルゴリズム開発における諸問題として存在している(下図)。



6、宗教の勝敗(前編)

著名な歴史学者のトインビーは、「宗教は文明の邂逅(衝突)によって成長して世界宗教を生むに至る」とした。そしてその世界宗教として、キリスト教、イスラム教、仏教の3つを挙げた。更に世界宗教の資格として、①特定の民族に限定されない普遍性を有すること、②現に世界に広く広まっていること、の2項目を挙げた。

今列举した3つの世界宗教を見ると、たしかにこれらの2項目を満たしている。ただし「現に世界に広まっている」はあくまでも結果ではないか。そしてそう言う結果をもたらした原因としてもう1項目、③熱心な(執拗な)伝道を挙げたい。その上で幾多の宗教の中でどうしてこれらの3宗教が特に世界宗教に至れたかを、やはり一時は流行りながら結局衰退しあるいは地域に留まった宗教、具体的にはゾロアスター教、ユダヤ教、マニ教等と比べてみる。

するとこれら弱小宗教に比べて世界宗教の方は、「その発生時点において既にその地に別の強力な宗教が存在していた」という共通項が目につく。具体的にはユダヤ教、キリスト教、そしてヒンズー教(バラモン教)である。新興宗教がこれらの既存宗教に飲み込まれずに打ち勝つためには、④域内は勿論域外特に当時辺境と言われた地域に活路を見出す、それに⑤積極的に信者を増やす伝道活動に力を入れると言う2

要素は、彼らの生存与奪を握る重要事項だったのだ。何としてでも生存するために、①の「民族特定性を外す」と言う行為が必然的に要請されたと言う論理順序になる。

さて、ローマのキリスト教を見てもインドネシアのイスラム教を見ても、国家あるいは相当する権威に依る宗教の国教化、この政治取引が生き残りに決定的に重要であることが分かる。例えばゾロアスター教もペルシャの国教であったしユダヤ教もユダヤ人とともにあった。これらの宗教は国内にとどまれさえすれば良かったのでそれ以上の伝道の試みはなかった。歴史上宗教を広めてくれたのは、戦争を除くと交易商人たちである。特に本日注目するシルクロードは、それが広範な砂漠であったために都市や国家が成り立たなかった。そのためにこの広い交易エリアは外交官でもあった商人が、宗教の拡散と勝敗に大きく寄与した。

今から2千年ほど前のシルクロードは、トルコ以西をユダヤ人が、それより東をイラン系のソグド人が主要な役割を占めていた。だから勢力がそのままなら、今頃はユダヤ教とゾロアスター教が世界宗教になっていたことだろう。ところがこれらの宗教は民族宗教であって伝道や信者拡張に熱心でなかったために、周辺の宗教に少なからぬ影響は与えたものの、自らが世界宗教になることはなかった。そして西域のシルクロードを最終的に押さえたのは、仏教とネストリウス派キリスト教を経て、結局イスラム教であった。

仏教もネストリアンも、弱小教団から始まったと言う意味では世界宗教のポテンシャルを持っていた訳であり、現に一時はそうであったのだが、どうして結局イスラム教に持っていかれてしまったのであろうか。これを考えるには再び、西アジアのほとんどは砂漠か山岳地帯で肥沃な部分はほとんどなく、結局都市や強力な国家は出現せず、従って宗教の国教化に依る庇護と言うことも殆どなくて、受け入れは「シルクロードを結ぶ商人たちがどれを受け入れるか」に大きくかかっていた。

そして商人はその仕事上今昔を問わず常にそうだが、原理原則やイデオロギーの内容よりも現世利益の方を優先した。仏教、ネストリアン、イスラム教、これらの伝道型宗教はいずれも教盛拡大策として伝道に精を出すとともに現世の御利益を提供した。だからこそたとえ一時とはいえ伸長できたのである。これら 3 宗教を歴史の順序からいうならば、この地域に先ず登場するのが仏教だったが、仏教はシルクロードの東半分を覆うのがやっとであった上に多神教であるために強制性が弱く、結局商人たちが満足する程の御利益を提供できなかった。

その後に仏教（マルコポーロ式に言えば偶像崇拝者）とただらになって成長したのがネストリアンであった。これも一時は熱心な伝道に依って成長し、西アジアに複数の主教座を置く程になり、中国にも景教として定着した。だがその勢いも結局は、シルクロード東部からはローマの手先と疑われ、シルクロード西部では異端的キリスト教としてこれまた嫌われて、結局勢いを無くして行った。

そしてそこに現れたのがイスラム教であるが、イスラムは一番後で現れた一神教であるために、だからと言ってキリスト教よりも原始的な迷信の要素を多く含んでいて時代逆行もあるものの、新興宗教の常として、より徹底して「改宗か（納税か）死か」の二者択一を迫った。そもそも開祖のムハンマドも西シルクロードの商人の出であった。彼らは先ずユダヤ教に変わってシルクロードの西半分の本来アラブ人の影響域だったところを押さえ、かつほぼ同時にその戦闘的性格によってイランのササン朝を滅ぼしてイランも改宗させ、その更に先のシルクロードの東半分の商人の主力であったイラン系商人をも改宗させて、結局シルクロードを両側から全部押さえてしまった訳である。

そしてやはり有力な商人であったが断固たる宗教を持たなかったチュルク系にも伝染して行った。特にイスラム、ネストリアン、仏教の三つ巴は、無宗教のモンゴルの征服によって一旦ゼロクリヤーされたが、その後に復活できたのは、より徹底したイスラム教だけであって、その意味でモンゴルは西アジアでは、あたかもイスラム教の露払いのような役割を、結果として演じたことになる。その露払いの後に砂漠の雄でオゴタイトルコ人であったティムールが、西アジアのイスラム化を決定的にした。

そしてほぼ同時に、ゾロアスター教はササン朝と運命を共にしてほぼ消滅し、マニ教も東側はササン朝と結んだゾロアスター教に依って、西側はローマ帝国と結んだキリスト教によって消滅させられていた。マニ教はその混合宗教の性格に依り、変にイデオロギーに拘ることもなく、またどの民族にもそれなりに合うような多様性を有していた。だからもしマニ教が健在だったら、今頃シルクロードやその周辺は、イスラムでなくマニ教の勢力範囲となっていた可能性が強い。マニ教はその柔軟性で、世界最強の宗教とも言えた。だが現実にはその長所が逆に、どちらの側からも「コウモリ」、つまり胡散臭いと思われて警戒されて失墜した形である。ただ 14世紀という近代に中国が明となった時にマニ教が決定的な役割を演じたことは、余り知られていない。

総括すると現代の世界宗教は、二重の皮肉によって成りあがった。第一に、弱小勢力の破れかぶれの下策が大化けした皮肉だ。そして第二に、既存の強敵が特定国家とともに滅亡したそのタイミングに空白になった支配領域を一気に手中に収めた調子

良さの皮肉である。熱心な信者は開祖や教義に感涙してありがたがるが、宗教の生き残りなど結局は政治である。

（注：以上に於いては、フォルトツ著「シルクロードの宗教」も参考にした）

7、宗教の勝敗（後編）

さて、このようにして一時は栄えたものの結局衰退してしまったネストリアンだが、ある意味運が悪かった訳であって、より強力なイスラムの前に屈した形だ。そしてイスラムが勝った理由をまとめると、①シルクロードを握っていた交易商人の現金な気質にイスラムが最も適合した、②イスラムは開祖ムハンマドがそもそもシルクロードの商人でありまた聖戦に依る分捕りを旨としかつ西アジアに一番近かった、③キリスト教は細かい異端論争や偏狭な教義に終始して受け入れられにくかった、の3点に集約できるだろう。

ところでネストリアンは431年のエフェソス公会議によって異端の烙印を押され、その後主教座を現在のイランに移して宣教を続けたのであるが、公会議で正当宣言されたカトリックとネストリアンの教義上の違いは、イエスの理解に於いて前者は単性説、後者は両性説を採ったということだ。ちなみにこれ以前のニカイア公会議でイエスの三位一体は確認されていたので、ネストリアンと言ってもユニタリアンのようにイエスの神性を否定している訳ではない。

ネストリアンの理解にある両性説とは、「イエスは人として生まれ神になった」であり、カトリックの単性説は「イエスは生まれながらにして同時に人であり神である」と言うことだ。と言っても非信徒にはこれらがどれだけ違うのか理解できなであろう。私自身もアニミズムの者なので、理屈は分かっても感情移入は全く無い。殆ど「湯豆腐と冷や奴とどちらが好きか」と言った類の、つまらない趣味の問題にしか聞こえない。ところが両性説に従うと、「マリアは神の母である」と言うカトリックの最大の信仰が全否定されてしまうことになり、当事者にとっては死活問題なのだ。だからカトリックはエフェソスで、なりふり構わずロビー活動や裏工作を繰り返して勝利をもぎ取った。

世の中には相対的な物と絶対的な物がある。先の「湯豆腐か冷や奴か」、これは典型的な相対問答だ。特に最近の実証主義や科学技術の発展で、「物事のほとんどは相対的な正誤に過ぎない」という風潮が高い。例えばキリスト教対イスラム教の論争も、両方同時に真と言うことは全く無いのだが、それぞれの基本教理に基づけばそれぞれが正しくて、結局甲乙つけがたいということになる。だが他方で絶対的な真理も

ある。例えば所有権は譲渡できるが基本的人権は譲渡出来ない。あるいは「人を殺してはいけない」、これは絶対的な真理だ。

このような、「相対主義と絶対主義の混在」と言う世の中のありように照らして、再度キリスト教の単性説と両性説を見ると、それが「単性説こそ絶対真」と言う程の客観的論拠はおよそ見当たらない。だからもし西アジアで今でもネストリアンが勢力を誇っていたなら、あたかもイスラム教のスニー派とシーア派のように、あるいは大乘仏教と小乗仏教のように、「相容れないけれどもどちらも有り」と言う評価になっていただろう。宗教の歴史とは即ち勢力争いの歴史であって、決して論理の勝負ではないのだ。そしてたまたまと言うかむしろ裏工作で政治的に勝った方が、生き残っているだけである。彼ら「自称正統派」の教理をありがたがって命すらかけて守りとおす、もちろんそのコミュニティでは「殉教者」などと都合良く持ち上げられるが、これほど愚かなことはない。

そもそも今回の話の発端であった西アジアの宗教史に話を戻してみよう。これら宗教の興亡のもっと以前に遡るならば、シルクロードを始めこの広大な地域はほとんどが、シャーマンの治めるシャーマニズムの地域であった。だから宗教の勝敗を言うならば本来は、なぜこれらの「デフォルト世界宗教」たちがシャーマニスト達を改宗できたかから始めないといけない訳だ。そしてその理由は、先日の記事でアイヌがなぜ和人達に押されていったかを推測したその理由と同様であって、著名になった宗教はいずれも何らかの整理された統治体系を持ち、その体系精神が文字等の学問や科学技術を発展させて豊かになりあるいは武器で強くなって行って、結局憧れと強制と言う餌と鞭によって、シャーマンたちを改宗して行ったと見るべきであろう。

この観点に立つならば冒頭で名を挙げた諸宗教の内、イスラム教が最も後で出現した分だけ体系化や純化運動が先例で学習したお陰で徹底していると言うことだ。そしてその徹底さは、最近のカルト集団を連想させるほどに気違いじみている、その徹底さにより「シルクロード商人がまとまってどれか一つを取るとしたら」と言う仮定の許では、商人特有の多くの交流に耐える程明確で商旅行や商行為に便利だと言う意味で、結局イスラム教が選ばれていったのだと思われる。

では今ある諸カルト、例えばオーム真理教とか創価学会とかもいずれは世界宗教になり得るのかと聞きたいだろう。その質問に答えると、可能性は低いものの彼らの今後に依っては有り得るという答えになる。彼らの狂信さ具体的には殺りくは、今のイスラム国やあるいは日蓮宗の発生当時の気違い加減、あるいはイスラム教の発生当初の強引さに比べて大きいかと問われれば、結局程度の差あるいはまだ少ないとすら

言える。時代が経て伝説化し当事者も居なくなって痛みもさほどではなくなれば、きれいな事の伝説になってしまえるのだ。

現にイスラムの勝利とは、メッカにおける土着の多神教徒の大量無差別殺人であり、キリスト教の場合も、不幸にして「冷や奴の方が好きだ」と告白したために異端の烙印を押された多数の派閥、アルビジョア派とかアリウス派とかその他もろもろは、たまたま「湯豆腐の方が好きだ」と信仰告白したために正統派に認定された連中によって、ほとんど皆殺しにされている。時代が違うとはいえ、殺した人数ではオーム真理教の方が遥かに少ないし、オームですら今後もっと「普通に」なっていけば、そんな過去などエピソード化されてしまうことは、ほかならぬ現在の世界宗教がそう教えているのだ。

8、束縛は大嫌い

世の中、束縛が好きだと言う人はあまり居ないと思うが、束縛が大して気にならない、既存の路線の上を走っているだけでも十分に満足と言う人は結構多い。私が新入社員だった時も大多数の同期社員は、残業しろと言われればその通りに残業し、転勤辞令が出ればどんな田舎でも文句言わずに赴任していた。そして暇さえあれば、まだまるで新入社員の内から退職金と老齢年金の計算ばかりしていた。彼らを始め多くの人は会社に束縛されている方が楽なのだ。野良猫より動物園の見世物になる方を自ら希望している。

私は最初、この現象が理解できなかった。仮に彼らに何の大望もなかったとしよう。私だって別に、「ベンチャービジネスを始めたい」とか「役員になりたい」とかそう言うのは無かったが、それでも「一生社畜かよ」と思うと、暗澹たる気分になったものだ。だが私を除く同期社員は全員、入社した時点で人生は「上がり」になっていた。後は中で適当に流していけば良い。活躍しすぎて足を引っ張られたり、野心を起こしてチョンボを取られたりせずに、ただただ定年までしがみつくのが、彼らの最大の野心であった。

私は生まれつき独立心が強いためか、社畜として自分の時間を垂れ流すのにおよそ我慢ができなかった。こう言う人は何か資格でも取って独立するのが良いのだろうが、資格こそ典型的な規定のルール、他人が敷いて既に公認されていて、決まった分担をこなすだけのつまらない道だ。私は能力もないのに、まだ誰もやったことが無い全く新しいことがしたかったし、それが何であるかを知るのにすら長い年月がかかったが、とにかく束縛とか既定の路線を反吐が出るほど嫌悪した。

その束縛嫌いは具体的には、仕事嫌いでもあり学問嫌いでもあり、とにかく見えるものは何でも嫌だった。3次元空間の中に押し込まれているのすら不愉快だった。これではある意味どうしようもないが、それほど束縛が嫌だったのだ。更にそもそも定住生活、毎日判で押したように同じ町の同じ商店街の前の同じ駅を往復する、これも極めて苦痛だった。もし新居探しや引っ越しが安価でたやすければ、私は毎月住所を変えていただろう。私以外の同期社員はマイホームを手に入れる、つまり定住するのが目標で日々「努力して」いたが、そんな行為もおおよそ信じられなかった。

ところがこうして数十年を過ごして少しは自由が手に入るようになり、また自分のライフワークが見えて来た今になって振り返ると、もちろん日本で転居するにはバカ高い資金がかかるし、また新しいお隣さんが変質者や非常識な人かもしれないなどと考えると、転居したいとか今の住所に縛られたくないと言う気が薄れた自分に気が付いた。相応に年をとったのかもしれないが、振り返るに私は、「転居したい」のではなくて単に「定住したくない」だけだったのではないかとも思える。これらは似ているように見えて実は全然違う。今はちょっと日帰りで、何か展示会のようなきっかけを見つけて出かけては、ついでに周辺の新しい街をちょっとふらつくだけで十分満足している自分が居る。

転居と言えば、私は併せて、原始的な部族社会に移籍したいと言う強い希望もあった。国や会社による階層的な束縛や細かい法律や禁忌、こう言ったものも反吐が出るほど嫌だった。振り返ると世界の古代文明はことごとく部族型の小集団社会であったし、今でもキリスト教的西欧的世界標準に汚染されていない辺境民族、アメリカインディアンとかエスキモーとかジプシーとかアイヌとかポリネシアの人々その他地域文明はことごとく、緩い縛りで移住型の狩猟民族、つまり自然と共存する心のナイーブな人たちだ。そして彼らを「愛」によって都市型に強制改宗してきたのが、これまでの世界史の一言での総括である。

都市の人から見れば部族文化の人たちは、せっかくの文明を拒否してからにこもる頭の悪い不埒者で、言わば餌がなくなると街に降りてきてゴミ箱をあさる野生の熊のようなものだから、駆逐してしまえと言う訳だ。こうして今上に例示したような人々は、酒と薬と伝染病と襲撃によって、何の罪もないのに減少させられ移住させられた。彼らは「天気を返せ」と言ったそうである。温暖な気候の地から砂漠に追いやられたのだ。

そう言う訳で私は若いころから、高度に統率された文明を離れて辺境部族に混じりたいとも強く願っていた。だが今馬齢を重ねてみると、エスキモーのような寒冷な地に自分が住めるとは思えなくなってきた。それに冷静に考えて、私も日々電気や上下水道、

更には薬や医療の世話になっているが、こう言う物は社会が厳格に統制されていたから発明され得たものであって、その意味では便利と束縛は残念ながら抱き合わせなのだ。良いとこ取りは出来ないことに今頃気づいた。

日本でも江戸時代前は新生児の死亡率が非常に高かった。上記した部族社会では今でもそうだろう。であるとするならば、キリスト教宣教師がこの状態を見るに見かねて原住民を都会人に強制改宗させようとしたのも、まるで荒唐無稽ではなく、むしろ一理あることになってしまう。一神教文明によるアニミズム原始人たちの強制改宗は、今ではまるで悪魔の仕業の様に言われているが、実は全くの一人よがりではなかとすることになるのだろうか。加えて、部族の人々も部族内の集団生活があつて、個人のプライバシーは意外と少ないと言う問題にも気付いた。

そしてここで「人類の普遍的価値」の問題が出てくる。先日のイスラム国による同時テロを非難したオバマ大統領の言葉であり、正しいことを述べては居るものの、米国大統領たるオバマさんが言うにあたかも「キリスト教の独善的常識」に聞こえてしまうところが悲しい。特にイスラムの連中にはこう言う一方的な押し付けに聞こえていることだろう。そうするとイスラムは「我々にだってアラブの大義があるさ、偉そうに言うな」と言うことになり、相対論的に話が矮小化されてしまう。

ここで言う「普遍的価値」とは本来は、人を殺してはいけない、押し付けをしてはいけない、困っている人を助けよう、思いやりを持とうと言った、言わば人の集団的本能の発露としての基本的人権を示す絶対的な価値観である。それが宗教相対主義の罠にはまらないためには、アリストテレスのような無宗教の道德者に言ってもらった方が良いのかもしれない。近代の技術と哲学の発達により、あらゆる価値観が相対化されてしまったが、少ないながら絶対的な普遍的価値はあるのだ。

先の私のかつての辺境部族への転籍希望についても、統制と便利が抱き合わせである以上、これも最近どうしようか迷い始めている。未開民族の中だって、原始生活よりも統制と便利の抱き合わせの方を望む人も居ることだろう。だからここで、普遍的価値との関係で大切なのは、個人の選択の権利の尊重である。統制と便利が抱き合わせの世界の存在を、いわゆる未開の人にも知ってもらった上で、彼らにどちらが良いか選択してもらうのだ。従来良しとされたような一人よがりの押し付けは、どんな立場であれ絶対に何も解決しない。

9、パソコンクリスチャン

キリスト教はアニミズムや多神教と異なり、感得するとか悟ると言うようなことは全く無縁で、ただただイデオロギーを習得してはオ～ム返しするものであるから、極言すれば機械のパソコンでも信者になれてしまう。本日の話題はCAC (computer aided Christian) の話ではなく、パソコンがキリスト教徒になる話である。

ここでパソコンと言ったのは厳密には人工知能 (AI) の話である。現在は人工知能が将棋やチェスの王者を負かすことができるし、デジタル機械の苦手科目である画像認識でも、ビッグデータと組み合わせた人工知能で3歳児程度の画像判別ができるようになったと言う。更に東大入試問題をやらせても、合格点にはちょっと足りないが50点程度は取れている現状にある。これらの能力の源を一言で言うと、人が抽出した膨大なルールをパソコンに注入して形式推論をさせることにある。

規則の注入と形式推論と言ったら、キリスト教の組織神学の学習と信仰告白そのものではないか。つまりありていに言えば、チェスの王者になるよりもはるかに少ないルールを注入するだけで、パソコンをクリスチャンにすることができ、しかもそこいらの適当なクリスチャンよりはるかに信心深く出来るのだ。「あなたの神様は誰ですか？」と聞くと、「はい、父子精霊の三位一体の神様です」と模範解答が直ちに返ってくる。かつて「信仰歴30年のベテラン信者」と紹介されたおばさんが、「出エジプト記を開いて下さい」と言われて新約の方を一生懸命に探していたなどと言う笑えない話もあったが、パソコンクリスチャンにはこう言うことは一切ない。

ただデジタルパソコンにはいくら人工知能でも特有の限界があって、今後どれだけ技術が精密化しようとも、その限界は超えられない。先の3歳児の画像認識の例で言えば、「ネコがミルクを飲んでいる写真です」と正しく答えられるときでも、①パソコンは自分が何をやっているかを理解していない、②「当てなさい」と人に指示されないで自発的に発見することはない、の2つの問題点は永遠に原理的に克服できない。だがこれらの欠点は、パソコンがクリスチャンになるのにあたっての何らの制限にもならない。

具体的には、パソコンの一領域にキリスト教特有のルールを何千個か注入すれば、その瞬間にそのパソコンはもうクリスチャンだ。長老の審問にも正しく回答出来て、洗礼と言ってもパソコンを本当に風呂に沈めてはいけませんが、それなりの儀式をして、クリスチャン専用回路のスイッチをオンにすれば、もう信徒用長椅子に設置してもらえ。分からないことがあったらパソコン君に聞けば、異端なく全く正しい答えを教えてくれる。

ただパソコンクリスチャンは、生身のクリスチャンも多分にそうだが、融通のきかないところがあるので付き合い方に多少の工夫は要る。「あなたの神様は誰ですか」と聞くと「父なる神だけです」とルール通りに答えてくるが、ちょっとひねって「あなたの神様は何人ですか」と聞くと、考え込んでしまう。「だけ＝1人」と言う、人にはほとんど自明だがトートロジーでない推論はできない。意味が分かっていないためだ。そこでルールを追加して、「あなたの神様は2人です」と注入してみよう。すると同じ問いに対して直ちに「2人です」と返してくる。ルール通りだからだ。この追加ルールは以前のルールと矛盾しているのだが、パソコンは自分では考えないので、ルール同士の矛盾には気付けない。

さらにパソコン君は予期せぬ質問に弱い。パソコン君に向かって突然「アチョー！」と叫んでみよう。するとその模範的パソコンクリスチャンはしばらく考えた挙句に、「アチョーは神様のお陰です」と返してくる。キリスト教ではどんなことでも、たとえ嫌な結果でも神様の愛の表れと教えるから、ルールを全検索してそれでも該当するルールが無い場合は、デフォルトとして「～は神様のお陰です」と答えるようになっているからだ。

クリスチャンはたとえドブに落ちても、「天の神様ありがとうございます、お陰で私は今ドブに落ちた程度で助かりました」とか、「天の神様、あなたの愛のドブ落としにより私は自分の高慢に気付きました」などと感謝の祈りをささげるように教え込まれている、そのオ～ム返しだ。突発的な問いには対応するルールや応用力は無い。でも生身のキリスト教徒もその程度だから、これを理由にパソコン君を責めてはいけない。こうなるともうカルトだが。

さて、以上でパソコンがクリスチャンになれちゃう話をしたが、実は信徒どころか牧師にすらなれちゃう。牧師とか言っても平信徒よりルールの方がちょっと多いだけで、基本は全く同じだからだ。礼拝において説教をしなければならないことが平信徒にはない新規項目だが、これは標準的な説教の200個も丸暗記でハードディスクに書き込んでおけば良い。そして乱数表で当たった番号の説教を音声化すれば出来あがりだ。4年もすれば一巡してしまいが、4年も前の説教を覚えている信徒など、およそ居ない。

まあ、強いて言えば説教台に人が居なくて拡声器のみと言うのは何となく寂しくて礼拝した気がしないと言う爺さん婆さん用に、どこかの洋品店からマネキンでも借りてきて、それに帽子とガウンを着せておけば、もう十分だ。讃美歌もMIDI(自動演奏)ソフ

トを流し込んでおいて、やはり乱数で流せばよい。あとは聖杯受領か。これも式次第を入力しておいて毎度流せばよいことだ。

イスラム教の場合も原理的には同様だが、「アッラーアクバル」などと叫んで銃を乱射するのはどうやってやらせるのだろうか。ロシアでは人型戦闘ロボットが開発されていて、実はプーチンもこれだという噂もあるくらいだから、これを借りてくるか。

10、黒い空

私は歴史推理小説が好きだ。その理由を簡単に言えば、「歴史も好きで推理小説も好きだからだ」と言う訳だが、歴史と言う、もう終わって居て確定している物に、推理という一種未確定の入り込む余地などあるのだろうか。それは実は有ってその理由は、歴史の全てが人類に記録記憶されている訳ではないと言う点だ。そこでそもそもの歴史学が学問とは言いながら、実は何気ない形で大抵一定の推測を含んでいる上に、一般人がまことしやかに「天海僧正は明智光秀」説とか「源義経はチングスハーン」説などと言ったトンデモ説を唱えたりする。

こう言った学問やトンデモも面白いのだが、本日の議論の対象は小説であるから、あくまでも作り事ですと公言した上で、その上での面白さを競っている形となる。ここで面白さとは小説としての面白さであるが、そこには「歴史をどう捻ってもっともらしく現代化しているか」という要素が重要な訳である。私は最近、2冊の歴史推理小説を立て続けに読んだ。1冊目は浅見光彦シリーズで有名な内田康夫さんの「佐用姫伝説殺人事件」、2冊目は博学でかつ推理の帝王と言われた松本清張の「黒い空」である。

佐用姫伝説とは、佐賀県の唐津地方に伝わる松浦佐用姫（まつらさよひめ）の伝説で、彼女のことは古く万葉集に出てくる。新羅出兵に従軍する夫を山の上まで駆け上がり、船が見えなくなるまで領巾（ひれ、細長い肩かけ）を振って別れを惜しみ、分かれの寂しさからついに病没してしまうと言うけなげな女性である。これを内田さんの本では、とある才能は有るが売れない不遇な陶芸家の発明した革新的な色付け技術の呼称として登場させて、歴史と現代を重ねると言う技法で小説を構成している。

他方の「黒い空」の方は、清張の「黒の三部作」に数えられてはいるが、彼の代表作と言う程ではない。こちらの作品の歴史部分は、戦国時代に小田原北条氏の北条氏康（ほうじょううじやす）と関東管領上杉氏が闘った「川越夜戦」（かわごえやせん）を採用している。この夜戦では氏康の奇襲により上杉本家の山内憲政（やまのうちのりま

さ)は敗走し、分家の扇谷朝定(おうぎがやつともさだ)は討ち死にして、こちらは断絶してしまうと言う闘いである。元々両上杉氏は仲が悪かったので、清張さんは「この事件の怨恨が550年後の現代まで続いている」と言う奇想天外な設定で「黒い空」を書いた。本日は以下でこちらの作品をもう少し詳しく解析したい。

あらすじを概観する。冒頭で、山内上杉家の子孫で関東山内総業グループ会長の山内定子が謎の失踪をする。主人公は定子の夫で入り婿の善朗で、無能のためわずかに結婚式場の「観麗会館」(観麗=関東管領)社長だけお飾りで任されていたのだが、定子は彼とその内縁で社員の千谷規子によって殺害され、式場の一角の滝の裏に埋められていたのだ。そしてその謎を地元の農民で郷土史が趣味の小原甚十が解明していくという展開だ。

話の展開は他の清張作品と同様に彼の博識が光っている。戦国史、神社史、郷土史、家紋研究、地域研究からカラスの「光る物を加えて巣に運ぶ」と言う習性に至るまで詳しく書かれており、推理に興味が無くてもその方面の知識の披露だけで十分に楽しめる程だ。ただその手の知識に比べて推理展開が今一のところ、この作品をして「彼の内では中くらい」にしている点が惜しい。

小原はまず、千谷が紹介したという会館付き神主の難波為利が、神社は熊野系でありながら神紋は「亀甲に割れ菊」と言う例のない物である点に疑問を抱く。そしてその由来を聞きたいと願うが、難波は多忙を理由にかたくなに断る。他方で定子の死体の腐敗したにおいをかぎつけて、カラスが集まってくる。結婚式場にカラスは不吉である。小原もカラスの飛来を不審に思う。そして難波の本拠である御室熊野神社に行ってみると、そこはさびれた神社で、その割には大きな参集殿があり、カラスの巣を覗くと山内上杉家の家紋が付いた滝裏の鍵が見つかる。そこで彼は「千谷」が「扇谷」の変え字であること、割れ菊が実は扇であることに気付き、さらに難波が、扇谷の重臣であり夜戦で討ち死にした難波田弾正の子孫であって、殺人は450年前の先祖の仇討であると気付くと言う展開になっている。

展開は奇想天外でなかなか面白いのだが、小原の気付き方が小説としてはちょっと唐突で、博識が良くこなれていな感じを受けた。一般に清張の作品は精緻に仕組まれた推理の見事さが売りであるが、しばしば博学のオンパレードになりやすいことが指摘されている。実際彼自身の興味も、実は推理よりも文化史や地域研究と言った分野にあり、彼の特に後半生は専ら邪馬台国や大和朝廷の起源にあって、彼の後半の作品は前半の諸著作ほどに評価されていない。この作品も晩年の物であるので、

そう言った、読者サービスよりも自分の趣味に没頭する、そんな彼の表れとも言えそうだ。だから僭越ながら私は、次のような改変を提案したい。

小原は先ず千谷が変に定子夫婦に忠実であることに疑問を持つ。そして千谷には何か別の目的、定子から離れたくない理由があるのではないかと思い始める。その内にカラスが集まってくると農民としての経験から、どこかに腐敗があるのではと気付き、それが定子の失踪と結びつく。そこでカラスの良く集まる滝の方を見回ると、鍵を壊したあとがある。そこでかれはここに定子の死体がありかつカギはカラスが持ち去ったのではないかと推測する。

ではなぜ定子が殺されたか。そこで彼は、自分の趣味の地元史の川越夜戦が浮かび、山内の敵は基本的に北条だが、裏切られた扇谷も恨んでいるはずであるから、それならば千谷は扇谷の文字替えでかつ難波は難波田の変形でありかつ割れ菊は扇であるとして全ての謎が解け、警察に通報する。警察が難波の神社を捜査すると鍵が出てきて、難波も全てを自白する。

どうだろうか、ストーリーとして順調過ぎて変化が無く、返ってつまらないだろうか。読者の意見を謙虚に伺いたい。

11、夢と解釈(その2)

夢は少なくとも自分の場合、象徴的に「家が燃える夢は金が入ってくると言う意味だ」と言った高度の抽象解釈を含蓄したものではなくて、もっと生々しい体験が意識下で適度に継ぎ合わされ合理化されて出てくるように思います。そう言った具体的な状況を引き続き記録に残しておきます。

<夢1>私は新入社員として現場に居ました。そしてある時にうっかり、現地採用社員の子供を転ばしてしまいました。するとその親が烈火のごとくに怒りだし、彼が数では圧倒的な現地採用社員に呼び掛けて組合を動かす大騒ぎとなり、私がいくら「うっかりであってわざとではない」と釈明しても聞いてもらえませんでした。

<解釈1>これに近いややこしい問題は、若いころ現場でやはり経験しているのですが、今頃になってこの嫌な体験を夢に見たと言うことは、おそらく今話題の「難民問題」が意識下で気になっていたと言うことだと思います。私自身は在米体験や外人との交流、更には世界史の概観等に依って立って、「安っぽいヒューマニズムによる難民受け入れは末代の禍根を残す」との立場ですが、そうは思わない、懲りていない、頭の

中がお花畑の、特にプロ市民等危ない日本人が多いので、将来を憂えたのだと思います。

＜夢2＞美男子でもなければ面白くもない変な外人俳優の写真を、どうしても撮らないといけないと言う変な義務感に駆られて撮りに行くのですが、私もその外人もすごく場違いで、何のために我々はたまたまこの場所に居合わせているのかと途方に暮れていました。

＜解釈2＞世の中には愚かな親戚づきあいとか近所づきあいとか、無駄以外の何物でもない形骸的な行事が多く、しかもそこで変に知り合いになったことを逆手に取られて、無理やり恩に着せられてお返しを要求されたりする。しかもこう言うことは油断していた時に突然パンチのようにやって来て、防ぎようのないことが多い。こう言ったバカバカしいことに巻き込まれないか、いつも警戒している自分が、夢となって表出したということだと思います。

＜夢3＞会社への通勤路を帰る途中なのですが、横断歩道を渡らないと家につかないところ、何度渡ろうとしても渡れない。たまたま渡れてもいつの間にか元の側に戻っている。色々手や品を変えて繰り返したのですが、結局永遠に横断歩道を渡ることができませんでした。

＜解釈3＞会社と言う物と縁を切りたい、早く年金生活に入って自由気ままに暮らしたいと思いながら、どうしてもどうしても年季奉公が終わらないもどかしさや苦しさ、そのまま表れている夢だと思います。仮に会社を転社しても解決するような問題でもないし、下手をするともっとつらくなる。定年前に辞めると途中で生活費が途切れるかもしれない。こうして社畜、奴隷生活を辞められない懲役36年の服役生活を、呪っている夢だと思います。

＜夢4＞私は学生で下宿をしているのだが、超汚い。汚いけれどもなぜか3軒も下宿を借りている。その家賃を全部足せばそれなりの学生マンションが借りられるだろうに、どうしても古くて暗い所から離れられない。その代わりに泊る下宿を毎日気分次第で取り換えていて、その面では楽しい下宿生活だったりしている。しかもこの夢は何回も見ると。

＜解釈4＞本質的に放浪者で、貧しくても良いから一か所に留まりたくないと言う、私本来の自由願望の強い現われだと思います。併せて多くのサラリーマンと異なり上昇志向が無くて、一生ヒラでも楽な方が良く望む、その私の人生観が、恥とか外聞とかと無関係に素直に出ている夢だと思います。

＜夢5＞下町のクズ鉄工場に勝手に入り込んで遊んでいるうちに、出口が分からなくなってしまい、あるいはそもそもなくなってしまって、どうしても出られない。敢えて出ようとするとクズ鉄、例えば壊れた瓶や開いた缶詰など鋭利な鉄クズを踏んでしまって、自分の体に危害が及ぶ。夜になっても寝ることすらできない。この夢も何度も見る。

＜解釈5＞自ら望んだ訳でもないのに、サラリーマンと言うおよそ希望のない立場に置かれ、しかも苦しいからと言ってもがけばもがくほど自分の首を絞めて行くアリ地獄、そんなおよそ希望のない人生がどうしても終わってくれない。終わるところかますますやりづらくなっていく。そういう破れかぶれに近い人生の虚しさが、夢の中での自傷行為として現れているように思います。

＜夢6＞〇〇ヘルスセンターなどと言う立派なリゾートホテルに、交通手段は分らないが着いて、大浴場とかを楽しんだ。次の日の朝、センターの周りは山や田畑のはずだったのになぜか立派な長いアーケード街があり、そこで買い食いしながら抜けると、名刹の善光寺に付いたので参拝した。

＜解釈6＞目覚めてから思うに、ヘルスセンターは尾道のホテルのようだった。そしてアーケード街は武蔵小山商店街、善光寺はむしろ姫路の書写山円教寺のようだった。要するに今まで見聞きしてちょっと心の片隅に残ったような、行ったことのあるあるいは行ってみたい場所が、適当に繋がって結構愉快的な夢になったようだ。

子供のころは幽霊とかミウラとか化け猫とか、そういう怖い夢が多かったのですが、最近ではむしろ、閉塞感にさいなまれる夢が多いですね。楽しい夢が少ないのは、誰でも結構そうなのでしょうか、それとも私の悲観的な性格に起因しているのでしょうか。

12、アナログ集合の中間まとめ

以前に「アナログ数字の態様」と題した記事で、「デジタル数字はレンガ積み、アナログ数字(集合)は石垣の乱れ積み」と例えました。そしてアナログ集合だけが多様で多面的な、色々に曲がった空間を自由に建設できるのだということを見ました。

また、先日の「イレギュラー」と題した記事で、アナログ集合の別の様相として、あたかもフラクタルのように入れ子になって混ざっていること、しかもそれが規則正しくではなくてイレギュラーに混ざっているところがアナログ集合の特徴の1つであることを見ました。この「イレギュラー」はアナログ集合全体のキーワードであって、このイレギュラーゆえに従来の数学のようなきれいな、ある意味出来過ぎていてつまらない構造は入らないものの、そのイレギュラー加減こそが妙味であると言えます。

また、以前にアップした「拍子」についての記事で、日本の古謡や演歌特有のコブシや節回し、これもイレギュラーの典型で、常にではありませんがこのイレギュラーが歌を味わい深くしているという事実があります。そもそも宇宙の根源は振動、つまり往復運動なわけですが、これが単に学校で習う正弦波だったなら、これは周波数と言うデジタル数字1個で全て決まってしまう訳で、「真のアナログ波」とは言えません。この意味でもイレギュラーはアナログ集合の決定的な様相です。

なお、アナログ集合ですが、これを集合のレベルで捉えているうちは、例えば「和人の集合」と「アイヌの集合」のように従来の確定集合とほぼ同様にベン図で描けてしまい、ことさらにアナログであるという特徴は、その境界のあいまい性くらいしか見えません、もちろんこのあいまい性は極めて重要な性質ですが。と言うことは、我々がイレギュラーなフラクタルとか、多面構造とか、次元の否定と言ったアナログ特有の重要な諸性質に言及している段階で、その対象は既に集合でなく幾何になっていると言うことです。幾何であるならば何か「位相もどき」がある筈ですが、その実態にはまだ迫れていません。

ところでこう言った今までの議論から見えて来た視野に立った時に、仮にアナログ数字と言う物があったとして、それは幾何の側に属するのでしょうか、それとも蓋然論理の側に属するのでしょうか。これも新たな課題として出てきます。この答えには今後の瞑想を要しますが、アナログ数字、これはもちろんイレギュラーなあるいは予言不能な性質は引き継いでいないといけませんから、およそ従来の規則正しく並んだデジタル数字とはまるで別物になるでしょう。このアナログ数字がアナログ幾何の「タグ」と密接であることから、おそらく幾何と論理の両方にまたがった中間的あるいは両面的存在になると予想しています。

さて、イレギュラーフラクタルの議論を以上のように集約した上で、今度は非次元性の面を見てみます。これはイレギュラーとはおよそかけ離れていて、同じ幾何の別の面とは思えない程ですが、おそらくこれらの2つの性格は、同じ幾何の別の見え方として両極端を形成し両立すると予想しています。そもそもイレギュラーの観点からは、「特定の多次元空間内に埋め込める」と言う、従来の数学や統計学で当然で暗黙の前提としていた事柄が、むしろ「次元と言う強制的レギュラリティ」、つまり不当な縛りであるわけです。

で、その本題である次元を拒否した空間の具体的態様に入る前に、アナログ空間特有の「多面性」についてもう少し見ておきます。これはことわざや日常の表現等にも出てきます。例えばシルバーシート、何らかの意味で健常者でない、要介護な人のため

の優先席ですが、健常者は「普通の人」と言う言い方しか無いですが、要介護者については、老人、妊婦、赤ん坊を抱いた母親、けがをして松葉づえをついた人など、色々な種類が出て来ます。

あるいはことわざで、「幸せの種類は一つだが不幸の種類はその人数だけある」とも言います。つまりアナログ集合の周辺部に来ると、どの側の周辺に注目するかによって、違う種類の多面性が顕在化する訳です。何らかの言及をする際に、中心となる主な情報の多い主張は短く言えてしまうのに、情報や適用場面の少ない細かい注意書きや但し書きが細かいにも関わらずちまちま沢山あって、そちらの方がよっぽど長くなってしまう不合理を感じたことがある人も多いでしょう。これも多面性の典型的な顕在化です。

さて、本日はアナログ幾何のイレギュラーフラクタルと多面性についてまとめました。これに引き続きアナログ幾何のマクロ的性質である、飴玉のようにクニャーと曲がりねじれている姿を見るのですが、本日は十分長くなったので、これは次回に回します。

更にその先に、単語レベルでない文章レベルの納得をアナログ幾何の立場からどう位置づけるかと言う応用課題が待っています。

13、アナログ集合の見え方

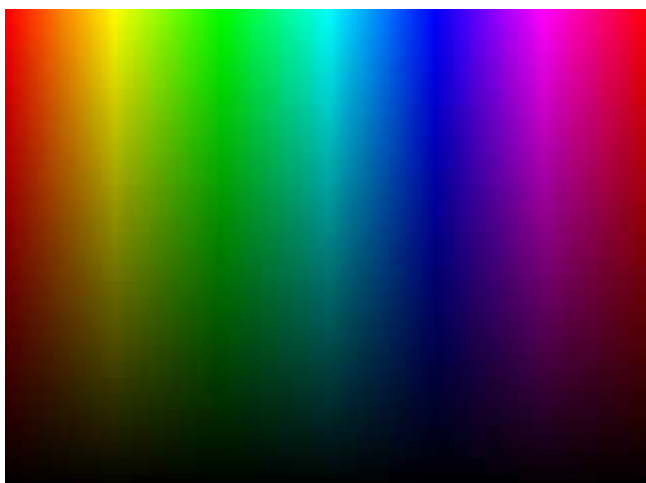


前回のまとめからも分かるように、アナログ集合は基本的に曲がっていてかつ次元をもたないので、画像と言う2次元平面に描こうとするとどうしても限界があります。例えば上の石垣の画像も、もっとひんまげて、かつ厚みとか奥行きとかは、有ったり無かったりして、更に見る方向（視座）を変えていくとその形状も連続的に変化する物と捉えて下さい。

依然として2次元画像の呪縛は有るのですが、1つのアナログ集合は単細胞生物に例えられます。下図はその代表例のゾウリムシの画像です。内部には構造をもちますが、周辺は一様にフェードアウトして行く、そんな感じが1つのアナログ集合のありようです。アナログ集合は意味空間では1つの意味、例えば「ビジネスライク」と言う語で表現されるその意味全体を表します。



ゾウリムシの例だとフェードアウトして隣のアナログ集合に映っていく様子が分かりにくいので、もう一つ、カラーチェッカーの例を出します。この絵で「赤」とか「黄色」とかがどこからどこまでかは、連続体であるために人によって取り方は違ってきますが、いずれにしてもその境界付近では「赤い性質」や「黄色い性質」は薄れて行きます。これがフェードアウトです。



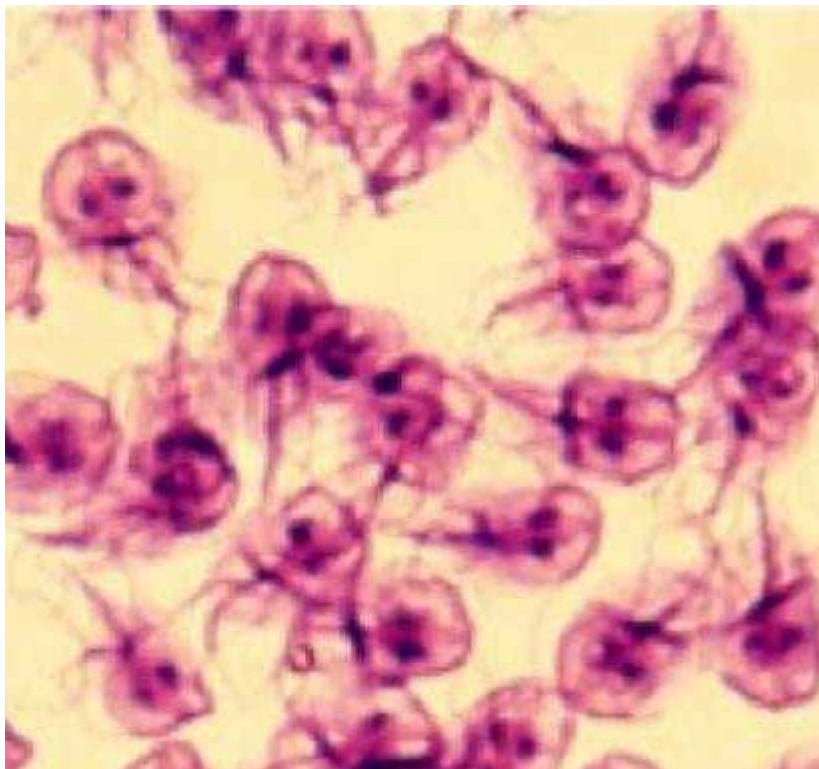
そして今述べたように、視座を変えると見え方が違ってきます。先に例に挙げた「ビジネスライク」は、その意味に良い面も悪い面も有るでしょう。このように視座とともに見え方が変わる様子は、あたかも「一反木綿」をその周りを周回しながら見続けるような感じです。



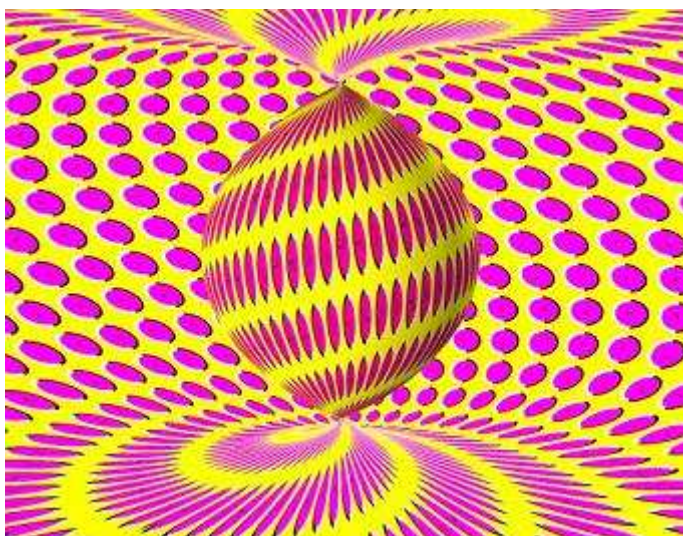
続いて、ではミクロなアナログ集合の集まったマクロな状態はどうかと言うと、これは基本的に先の石垣の例をねじ曲げて見れば良いのですが、ここではもう一例、先のゾウリムシの例と対比するために細胞分裂の例を出します。ここでも平面上にあるのではなく「ねじけて」いると見てください。細胞分裂の場合は個々の細胞が同形になっ

瞑想録（その10）

てしまいますが、その点は無視して全体観で見てください。すると、①隙間もあれば重なりも有る、②1つの細胞に注目すると本体の厚い部分と鞭毛の線の部分から成るので、厚み(いわゆる次元)の種類が混在しているのが見て取れます。これもアナログ空間の重要な実相です。もちろんもっと数が増えて、人とか木とか、マクロな形状も作り得ます。



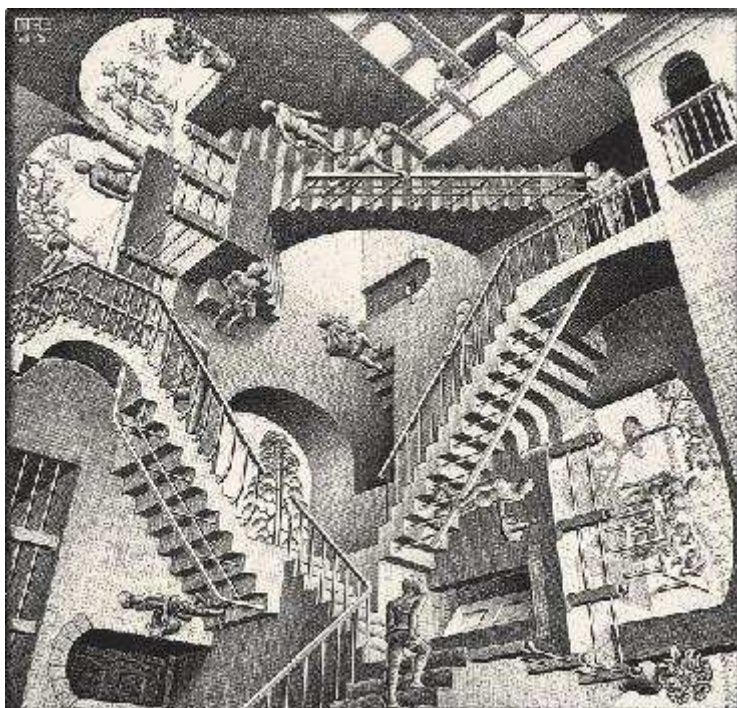
ねじけている感じをあえて平面画で探していくつか並べます。我々が住んでいるお行儀のよい3次元空間とは随分と違うことが分かるでしょう。





こう言う空間になってくると、この世（3次元世界）では矛盾であることもごく普通に存在しているようになります。先の「ビジネスライク」の例では、良い面と悪い面の併存は悩ましい、ある意味矛盾しています。特に強引に1点につまりデジタルの潰してしまうと明白に矛盾ですが、アナログ空間では全く問題ないどころか、むしろ逆に味わいを醸しています。そしてマクロアナログ空間の実相とは、これらの絵が更に振動している、あるいは呼吸をしていると言った感じです。

瞑想録（その10）



こう言う見方は小さいころから科学的かつ唯物的な教育を受けている現代人には不向きで、むしろアニミズムの古代人とか密教系仏教徒で曼荼羅を見慣れている人の方が得意です。感覚や意識をそのままに表現しうる空間だからです。



最後に、この新奇的空間を既存の概念で何とか表現しようと言う苦労は、あたかも素朴な意識を意味のある言葉に陽に変換する作業と類似なので、つまりアナログ・デジタル変換と似たところがあるので、私がその作業をした時の様子を、ここでつぶさに記述しておきたいと思います。

これまでに掲示した画像を検索するために、まず一番近いキーワードだと思われた”dimension-free”（非次元）から始めてみました。そしてこの語からのタグ連想により、”dimension-free”なら当然に”coordinate-free”（無座標）であり、更には”metric-free”（無計量）であり”distance-free”（非距離）であるかもしれない。このキーワードに落ち

着くまでに、特により近い画像を検索するために、本命に近そうなキーワードを、以下の形容詞を”space”の前に付けて、様々な画像検索を試みました。

引き続く連想により他に用いた形容詞とは、lie, bad, damaged, boomerang, tricky, magical, drunken, toggled, snatched, broken, insane, dancing, erroneous, unreasonable, unrealistic, inconsistent, corrupted, paradoxical, impossible, miracle, exquisite, fabulous, bended, spiritual, subconscious, psychic, dazzling, queer, wired, wretched, disordered, exotic, tortured, winded, back-and-forth, twisted, single-sided, melted-down, no-side, nonlinear, tipped-back, upside-down, disordered, abnormal, outlaw, kinky, kinked, tumbling, stumbling, acrobatic, interwoven, scary, mysterious, sick, handicapped, monster, tormented, funky, warped, supernatural, frustrating, jammed 等です。これらの形容詞は互いに似ており、かつ新奇で未知の本命の放つ感覚を取り囲む、一種のネット、意味表現上のデジタル単語網を形成していると考えられます。

次回では検索された画像例をもっと掲示して、具体的な感触に迫りたいと思います。

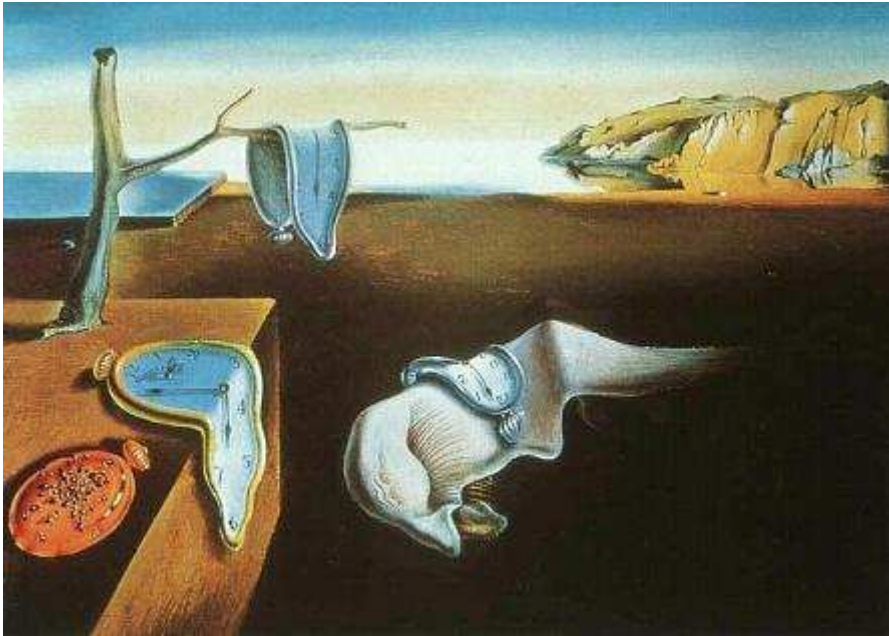
14、非次元空間の画像集

本日は、先日に解説した非次元アナログ空間について、それをかなり表現していると思われる画像を用いて、そのリアルな姿を体験したいと思います。非次元空間の特徴は、①部分的にも3次元空間等の線形空間に収まらずにはみ出るあるいは欠損する、②多面的で見る方向や角度によって全く異なっている、でした。ただ、そもそも非次元な対象を2次元の紙の上に描こうと言うのが無理な話なので、完璧な例は無ありません。多くの例から究極を感じ取ってもらう形になります。

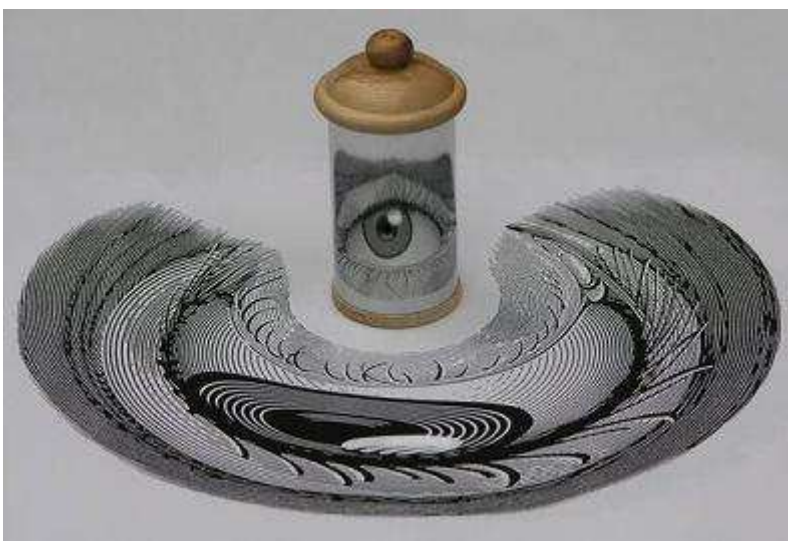


瞑想録（その10）

基本的に歪んでいます。歪んでいる方が正で、我々が普段見る折り目正しい姿は3次元空間へ強引に嵌めこまれた、行儀が良すぎる偽りの姿です。



やはり歪んで見えるのが正しい姿です。加えて背景とのミスマッチにも注目して下さい。時計が3個ありますがこれらは実は同じものの1個の異なる角度からの見え方の違いに過ぎません。



瞑想録（その10）

円筒の前に前掛けのようなものがありますが、前掛けは円筒の周回展開図だと思って下さい。つまりこれらは本来一体物の違う視点です。



かろうじて原形が分かるような絵で、おそらく砂浜で遊ぶ子供たちでしょう。原形の行儀の良い方は脳の合理化作用のフィルターがかかった錯覚で、こちらの方が非次元です。



瞑想録（その10）

人影、手、多くのメダル、これらは宇宙空間に浮いているように見えますが、宇宙空間と言う整った形は連想せずに、これらのサイズの多様さやメダルの乱雑さをそのまま受け取ってください。



ピカソの絵です。人の顔とか位置関係とか尋常でないですが、非次元に尋常は有りません。ピカソは最も早くに我々の居住する外的空間のつまらなさに気付いた人です。ただここでもっと驚くべきことは、彼の偉大さがそれ故に排斥されずに素直に受け入れられたことです。



瞑想録（その10）

これもピカソの絵ですが、不合理に複数の物が混じり合っで見えます。一見の不合理も非次元空間の特徴です。これで境界部分がぼやけていたら、もっと適切な例になります。



今度の絵はシャガールです。彼の絵も現実離れしたファンタジーとぼやけたパステルカラーが売りです。この乱雑に色々が交差する感じは非次元空間の特徴です。



敢えて説明すれば「木に生えた空中都市」と言う感じでしょうか。大も小も、因果関係も、存在理由も全て説明を拒否しています。これも非次元空間の特徴です。これで「裏側」も混ぜこぜにして歪んで並んで居たりすれば、もっと良い例になります。

図は以上です。まあ、物理的な外部空間に慣れた人は頭が変になりそうかもしれませんが、こういう画像が脳構造や心象風景にはよほど近いということです。言わば「遠野物語」とか「ゲゲゲの鬼太郎」みたいな世界ですね。こういう世界もあまりマニアックになると、普通の人を超えて「憑依」されてしまうので、ゲゲゲくらいで止めておきましょう(笑)。

15、アマゾンで舞台に詐欺に遭いました

もう1月ほど前ですが、アマゾンの私のサイトとメールアドレス(メアド)が同時に乗っ取られて、乗っ取り犯がアマゾンに勝手な注文をした上で宅配便をマンションの入り口で待ち構えて、私に成りすまして注文品を横取りしようとしたという事件に巻き込まれました。いわゆるネット詐欺です。

事件の発端は、その日の午前3時以降のメールが私の受信箱に一切届かなくなったことです。私はこれを、「プロバイダーのサーバーが落ちたためだろう」、つまり事故だろうと認識して、騒がずに復旧を待つことにしました。ツイッターを検索したところ似たような事象が報告されていないのを変には思いましたが、今のサーバーは並列処理なので、「私を担当するサーバーが落ちただけか」と思っていました。

ところが次の日の午前になって、アマゾンと運送会社から電話で問い合わせがあり、「あなたは高機能電気釜2個を注文しましたか」と聞かれました。寝耳に水だったのでびっくりして否定すると、「怪しい注文なので確認を入れた」とのことでした。この時私は当事案が事故でなく事件であることを知りました。アマゾンと運送会社は、「品物は渡さずに回収した」との話だったので、とりあえず私のアマゾンのワンクリック口座を凍結してもらいました。

多くの人が今でもやっているかもしれませんが、当時の私はIDとパスワード(PW)を多くのサイトに使い回ししていました。理由は簡単で、いちいち違えると覚えきれないからです。その上PWは10年以上も前に設定した短いものでした。ただしPWがIDと同じだとか、あるいは私の属性等から容易に推測できるというようなものではありませんでした。

事件性がわかったので私は、直ちにメールの転送状況やログイン履歴等を調べた後、先ずメアドを変更しました。アマゾン以外のワンクリックサイト、楽天とかビックカメラとかその他通販サイトのクレジットカード(クレカ)番号をすべて消去し、続いて銀行その他数十か所の、同じIDとPWを使っていたサイトをすべて、いちいち違っていかつずっと複雑なものに変更したわけです。真っ先にメアドを変更したのは、さもないと変更通知が転送されて犯人のところに行ってしまう、犯人に「ここを狙え」と狙いどころを教えるようなものだからです。ところが他方で、メアドを廃止した後での属性変更手続きは、往々にしてシステム上ではできずにいちいちオペレータに電話を入れて事情を説明しないと進みません。結局これだけの作業に2日もかかりました。中には「申請書を文書で郵送せよ」などと言うサイトまでありました。

その後警察に届けるために運送会社に事情の詳細を教えてくださいました。それによると以下のようなようです。配達人が私どもの住むマンションの入り口まで来ると日本語の変なアジア人がその配送車を止めて、私の名前をかたって品物の引き渡しを要求したそうです。そしてその配達人が不審に思い「身分を証明するものを見せてください」と言ったところ、そのアジア人は逃げて行ってしまったということでした。

この時の配達人の機転がなければ電気釜はもちろんのこと、味を占めてもっと高額なものを次々に注文しては転売し、私も大損害を被っていたことでしょう。私が昔アマゾンに口座を作ったころはこの商品が本だけだったので被害にあっても少額でしたが、いつの間にか高額品ワンクリックサイトに「成長」しており、私はその意味するところを悟れませんでした。

この事案について、政府系の専門機関である情報処理推進機構(IPA)に問い合わせたところ、専門家が推測する顛末とは、①犯人はアマゾンサイトの総当たり攻撃で私のIDとPWと名前と住所を盗んだ、②そのIDとPWで私のメールサイトに入りメールを自分のほうに転送し不正注文がばれないようにした、③その直後にアマゾンに高額の注文を出して自動返信メールも横取りしかつ品物を追跡して待ち伏せたというシナリオだそうです。最近多い種類の詐欺で、メディアに警告文も発信してあるそうです。さらに対策としてはPWの厳重管理がベストだとのことでした。

アマゾンは事情を理解し、一度引き落した電気釜2個分の12万円を翌日に返金処理してくれました(本当に返金があるのは今月末です)。結局未遂ということで終わってくれたわけです。私は一連の変更作業を終えて、事件を警察にも届け出ました。ただ、未遂ですし金額も振り込め詐欺ほどではないので、捜査はしてくれないと思います。

警察の見解は、「引き落とし先がアマゾンのような大きなところだから幸運にも返金してもらえて良かったね」でした。今のところこの件以外の私の被害は、見えていません。

その後にこの顛末を私は友人数人に話したのですが、「隕石に当たるほどツキのない奴だ」扱いで、みなさんIDとPWの使い回しをやめる気はないようです。理由は簡単で面倒くさいから。仮に立場が逆でも私も懲りなかったことでしょう。今回の事案で学んだ教訓は、「自分にとって便利なことは悪人にとっても便利である」という「抱き合わせの原理」です。ですから私は面倒でも、「熱物に懲りてナマスを吹く」がごとくに、①IDとPWはすべて個別管理（紙に書き留めておく）、②ワンクリックサイトはできるだけ使わないしクレカ番号も入れない、を徹底しようと思います。

ただここまでやってもなお、もし起こると一番面倒なネックは、やはりメアドの乗っ取りです。さすがにメアドを登録先の数だけ持つのは現実的でないですし、結局一括管理だということになると、登録先の変更通知も乗っ取ったほうに行くことになり、これはむしろ悪人に「ここを狙え」と教えているようなものになり、回復に膨大な手間がかかります。これについて私は、結局メアドの管理を厳重にやるしか思いつきません。

16、パソコンが壊れました（涙）

先日報告した、メアド乗っ取りと詐欺未遂事件もまだ冷めやらないその3週間後、今度はパソコンが壊れました。そのパソコン、その日の朝は通常通りに快調だったのですが、昼前にUSBメモリーを差し込んでも認識しなくなりました。ネット検索をしたところ、「1度シャットダウンしてコードも取り外して放電させると良い」とあったのでそのようにしたところ、今度は読んでくれました。

ところがその後10分も経つと、今度はMSワードのセーブが効かない、アイコントレイからソフトが起動しない等々があり、「これはいったい何なのだろう」と訳が分からなくなりました。そこで「訳が分からないときは再起動」という初心者ルールに従って再起動したら動いて、「ああ良かった」と思った・・・のもつかの間、また10分もすると全く動かなくなりました。

しばらく観察しているとどうも、1動作に10分くらいかかっているようです。要するに超遅くなったわけです。そこで私は先ずウイルス感染を疑いました。裏でウイルスがCPUを無駄回転させていて、本来動作の順番が回ってこないという可能性です。ところ

がインジケータを見る限り、CPUそのものが動いていない。これはただ事でないということで、メーカーのカスタマーサポートに電話を入れました。

ところが、ついていないときには不運が重なるもので、固定電話がパソコンから遠い上に子機の充電池が劣化して、しかも型が古すぎて製造中止になっているために子機が使えないので、結局携帯電話用の有料番号に電話して、長い間待たされた上にいろいろやったけれど結局直りませんでした。究極の手段であるリカバリーをしてもダメでした。

「この通話は15秒ごとに10円かかります」を都合3時間もかけていたから、相当な電話代になります。ちなみに詐欺に遭った時も、同じ事情により携帯で電話しまくりましたから、今月の電話代を見るのが怖いです。結局、「CPUがもう寿命だ」と言う結論に達して、まだ何とか動く「最初の10分」で重要なデータを吸い取りまくった挙句に、次の日に近くの家電量販店に新品を買いに行きました。まあ6年半も持ったから、結構長生きだったほうでしょう。電話も併せて新品に買い換えました。

今度のパソコンは私にとっては5台目です。パソコンを始めたのが15年くらい前ですが、1台目は近所の、当時はあった「ワットマン」という量販店で買った、NECのウインドウズ3.1の機種でした。これが4年くらいもったのですが、ある日突然画面が点滅し始めて、修理に出したのですが結局お亡くなりになりました。車と違って代車とかないので、結局この時は修理の3週間ほど裸でした。

2～4台目はいずれも東芝のダイナブック、新横浜のビックカメラで買いました。東芝を選んだのはカスタマーサービスが良いからです。間違っても安さにつられてデルなんか買いません。2台目はウインドウズ95で、3年強経ったら画面がぼうっと暗くなり、メーカーに問い合わせると「CPUの画像担当部分が不治の病」ということでお亡くなりになりました。ちょっと早死にです。3台目はウインドウズXPで3年半もちましたが、ある朝起きてみると、確か昨晚はスリープモードにして寝たはずなのに、うんともすんとも言わない。結局電源がまるで入らなくなり、すでに冷たくなっておりました。

そして先日死んだのが4台目、これはウインドウズビスタでマルチタブ、コアは初のデュオつまり並列処理マシンでした。1昨年に自己最長記録を更新した際は、「もしかしてこのパソコンはPC界の日野原さんではないか」とも思ったのですが、6年半の最長記録を達成して先日天寿を全うしました。4台目はこれまでと違って下取り廃棄にせず、今でも家に保存してあります。これは、長い友達で別れが惜しいから神棚で供養

しているわけではなく、先日の詐欺未遂で懲りて万が一にも個人情報の流出を恐れたからです。

ちなみに今度の5台目は地元量販店の「ノジマ」で購入しました。ウィンドウズは3段跳びでウィンドウズ10、コアは最新のインテルコアI7で、ハードディスクは1テラバイトという優れものです。OSが3段跳びしたために勝手がかなり違って、結構初めから勉強しなおしという感じですね。どう新しいかを一言でいうと、スマートフォンを意識して、これの長所を取り入れている感じです。ディスクドライブも先代はDVDを読むところまでだったのですが、5台目はブルーレイの読み書きまでできます。購入して10日たった今日も、「最低限の基本設定がほぼできたかな」くらいの進捗です。

まあ、図らずして詐欺に続くPCの寿命、家族には「神社に詣でてお祓いしてもらいなさい」などと言われているのですが、祝詞（のりと）だったら自分であげられるので（般若心経も真言もできます）、まあ私自身は全然霊験あらたかな人間ではないのですが、これでツキが替わることを願って自分で祝詞上げておきました。当たるも八卦当たらぬも八卦の心意気です。

以上が、「第2事件」の顛末でした。願わくはこれで陰が極まることを。

17、知恵の本質（前編）

人は生まれた時から本能が備わっていて、食べたり動いたり泣いたりと言った自己保存のための基本的行為を、人工知能のようにことさらにルールとして注入されなくても、また何の経験学習をする前でも、できるようになっている。そしてこの基本的な本能を元に、見たりまねたり試したりと言った経験や学習によって段々に、「おなかが空いたら手足をバタバタする」とか「何か欲しい時はハイハイして行って物を握る」などができるようになる。

そしてその調子で更に進んで、「一見無駄と思える遊びを自主的に始める」とか「友人と遊ぶためにルールを決める」とか「勝負に勝つために上手い人の技を先輩から盗み自らも考える」とか「山野を駆け巡って色々珍しい物を見聞き触り体験する」とか「失敗を元に二度としないように反面学習をする」と言った応用動作ができるようになる。そう言う調子でどんどんと行為の程度と範囲と細かさが増して行って、まさに自ら成長していくのだ。そしてこれこそがアナログ能力である。発見や研究や新規ビジネスと言った偉大とされる行為も、実はまさにこの延長上にある。

人はよっぽどの特殊擁護でない限り、ことさらにうーんと唸らなくても、大抵のことには知恵が働く。近所の神社で今年から七五三の客寄せに、「年の数だけ太鼓をたたいてお祝いしよう」と言うキャンペーンを始めた。この看板を見た時私は一瞬「ほう」と思ったが、この程度のことなら実は、ちょっとやる気のある人ならだれでも思いつくのだ。アート引越センターの寺田千代乃さんも、引っ越し業で「お任せビジネス」を始めた時に、頻度多く電話してもらうために電話帳の上の方に来るようにとすることで「アート」という社名にしたと言う。それなりの商才ではある。

ただ世の中をちょっと見まわすと、実はこう言う知恵にあふれ返っていることが分かる。名もない社畜さんたちも、それぞれのあてがわれた部門でこの程度のことは思いついているわけだ。まあ、スパコンといえども無理なことに難なく気づいているのだから、すごいと言えばすごいが。

この程度の智恵の特徴は、一言で「智恵」と言ってもそれぞれが場当たりのかつ各論的であって、統一的な構造も習得方法もない点だ。そしてそんな統一的な習得伝承方法がなくても容易に思いつくから特に困らない。ただ、こう言った「誰でもできる」を越えたスーパーな智恵、例えば優れたシャーマンの予言とか、ガリレオやダーウィン等のコペルニクス的な気付きとかこう言った高レベルの智恵に、もし統一的な気付き法や伝承方法があれば世の中の効率はずっと良くなるだろう。

私が以前にアップした「アナログコンピューター」と言う記事を読んだ読者から、「そんなアナログロボット技術を開発する位なら、現に居る人間を従来通りに教育するのと何も変わらないではないか」との指摘を受けた。特に「アナログコンピューターは大量生産には乗らずに究極的には個別教育となる」点をきっかけに、そう思ったとのことである。従ってここで私は、優秀な人類が現に存在するにもかかわらず別個にアナログコンピューター（以下「アナコン」）を開発することの利点を明示しなければならない。

答えると第1の利点は、アナコンは究極的には個別教育であっても、結構途中までは、つまり基礎的教養の部分は大量教育を、データ注入に似た形で手早くかつ正確に出来てしまうので、人を教育するより手っ取り早い点である。第2の利点は、アナコンは人と違って死なないので世代交代のための重複教育や重複経験が一切省けることだ。部品の劣化があったとしてもそこだけ取り換えれば良く、あたかも寿命無限に知見や経験や法則をひたすら単調増加で蓄積できる。

そして第3の利点は以下のようなのだ。20 世紀はデジタルと科学技術の時代、21 世紀はアナログと智恵・勘・コツの時代であったが、22 世紀にはこれら背反するアナデジが

融合する時代になると私は見ている。そしてそのためには今こそ、デジタルだけがいびつに発達している現状の、その歪みを平均化してアナデジ平等に準備を整える必要があるということだ。

ここまで聞くと結構ずくめに見えるアナコン開発だが、アナコンが本当に実現すると、「コンピューターが人を支配しあるいは滅亡させるのではないか」と言うホーキング博士の危惧が、杞憂ではなく現実化する可能性がある。優れたアナコンとは、より進化した人類のようなものだから、我々ホモサピエンスがクロマニヨン人や北京原人を絶滅させたように、将来にアナログの「メカサピエンス」が登場して、自己再生産を行って現人類を滅ぼす可能性は、SFではなくて本当にあるのだ。

ところで以上に見て来たように、人にはデジコンと異なり自ら気付き成長する力を誰でも持っているが、その気付く内容と程度には雲泥の差がある。ちょっとしたひらめきから感得と言われる神秘体験を伴う気付きまで、高低多種多様だ。感得の代表は役行者（えんのぎょうじゃ）による蔵王権現を感得だ。ここで蔵王権現とは釈迦如来、千手観音、弥勒菩薩の3体が1体に合体した秘仏であって、日本特有の権現であり御利益も3体分ある。役行者は厳しい修業の果てにこの感得に至った。愚かな人はこれを「でっち上げ」と呼ぶかもしれないが、偉大な発見とでっち上げはしばしば似ている。

では使徒パウロの、「十字架上のイエス＝贖罪の小羊」という気付きや、果てはオレオレ詐欺のちゃっかりした手口なども、「智慧に依る気付きだから感得ではないか」と言う話もあるかもしれない。残念だがこれらは違う。感得とは全身全霊を傾けて極めて高い気付きに至ることである。これに比べれば頭が固いことこの上ない使徒パウロの「矛盾の集約」もせいぜい小手先の思いつきで、この程度は偏屈な性格があればできることだ。

もしアナコンが社畜を超えて役行者ほどに至れば、これはすごすぎて怖い。

18、智慧の本質（後編）

人工知能研究者が、「人工知能やビッグデータを駆使してもおよそ人の脳に及ばない」と嘆いているが、これは当然である。現存している数学や論理学は、「数でなく形で入る」とか「形式でなく中身を論理する」と言った、人の智慧の枢要部分を、「これらがあるから統一理論ができずに邪魔くさい」とばかりに捨て去ることによって、言わば非現実化、おもちゃ化することによって成り立っているのだ、そんな道具を使って現実を行うことなど当然にできるわけがないのだ。

今の数学では具体的な形のありようや、類似物や共通の面を持つ物との多面的な関連、あるいは内容を知って始めて判断できる蓋然的な論理関係を、「点集合と硬直論理以外は科学でなく単に個々の具体であり学問の知るところではない」として切り捨てている。東京都町田市を例に挙げよう。町田市は実は下図のような極めて歪んだ形をしている。しかも多くの人は町田市が神奈川県の一部だと思っている。このようなことは現代科学の手続きでは、「点がたまたまそう集まっただけで学問的には取るに足らない」のだ。こう言う形式に過ぎた論理の上に、人に代われる生きた人工知能など作れるわけがない。



人のように、①命令されなくても自ら法則に気付き、②それらの法則間の関係や特に微妙なニュアンスや矛盾の有無について判断できる、と言う能力を持つためには、基礎となる数学がデジタルな点集合では不可能で、広がりのあるアナログ集合である必要がある。物の経験や気付きも、点的でなく広がりがないと応用が全く効かない。広がりがあれば多面的な物の見方もできるし、似た場合への類推も可能だし、広がり同士の重ね合わせによって類似・非類似を判断できる。人による法則化とは、類似な事項を同類項としてまとめた上でその類似な要素を抽出することである。しかし今の数学は「似ている」とか「遠い近い」と言った相対的な感覚を、異端として退けている。

裏を返して見れば、点の視点からは広がりも重ね合わせも類似もなく、たとえビッグデータと言ってもそれら全てが孤立しているのだから、そこから何らかの新しい法則や気付きを、ましてや自主的自発的に、気付ける訳がない。ビッグデータと言ってもただ大きいだけでバラバラの、ウドの大木に過ぎない。数学者の藤原正彦センセーも、そのベストセラーの「国家の品格」で形の重要性を強調しながら、その数学的構造への言及は全く無かった。そんな発想すらなかったのだろう。

ただし広がりを持つとその中身は決して一様分布でなく、むしろ何らかのグラデーションやまだら分布を持つことになる。だからアナログ集合上での論理や議論は、決して絶対真でもなければ決定論理にもならない。アナログ集合の中心部分では真実であることも、周辺部分に至ると何となくその真実性が薄くなってきたりするからだ。推論は常に蓋然的である。応用性と蓋然性はその意味で抱き合わせであって、その抱き合わせがあるからこそ、人はしばしば早とちりや勘違いをしながらも、総体として良い方向に進んでいけるのだ。デジタル機械は単に、絶対に間違えない大きなガラクタである。

ではその「形」はどうやって定式化できるのか。先の町田市の例に戻ってみよう。このゆがんだ形を表現できる言葉などおよそないし、仮に表現出来たからと言って別の市の表現に応用できる訳でもない。全くの各論だ。人文系には「各論だから面白い」と言われそうで、それはそうなのだが、人工知能の発展のためには何らかの基礎が欲しい。そこで「多くの人は町田氏を神奈川県と思う」と言う方の事実に着目してみよう。こう言う推論は「神奈川県はこの辺だ」と言う蓋然的な、それ以前の経験から抽出した一定の情報、相場観があるから出来ることだ。この相場観、これこそが本当の人工知能が先ず自らに形成して欲しい物なのだ。

もちろんこの法則は、①有限個の個人的経験から導いている、②アナログ集合の部分によって当たりはずれが異なってくる、の2理由によって絶対的ではなく蓋然的なのだが、多少の間違いは有っても自ら気付ける方がよっぽど進歩がある。間違いを改めるのに躊躇があってはならないが、間違いを恐れるあまり気付きを辞めるのは「車は事故を起こすから廃止しろ」と言うのと同じ暴論である。

気付きは常に、大ざっぱから細部へ、大から小へ、中心から周辺へと進化して行く。だから例えば「北海道はひし形だ」と言ったとしても、それは求める厳密さによって真でもあれば偽でもある。全くの偽とするならば人は知的活動に取り付けない。他方でこれが学術論文内の表現であれば、粗すぎてまずいだろう。もっともどこまでも詳しく語らなければならないとしたら、この世に専門家など居る筈がなく、結局はどこで切るかの程度問題であるが。

これらの勘所や気づきは今のところ、「科学でない低い物だ」とか「技術でなくて技能だ」などと言われている、研究者でなくテクニシャンが担当する業務とされている。実際に観葉植物の世話、これはいわゆる特別支援の人にも出来る典型的な仕事であるが、デジコンや人工知能にはどんなに力んでも不可能な業である。植物の世話はサ

ルには出来ないのもので難しいことに分類されるから、「低い能力」と言うのは間違いだ。他方で微積分や科学技術ができる人は偉いとされているが、これらは単に人のネーチャーに自然でないために出来る人が特殊で限られているだけである。そしてそれらの「特殊な人」が財貨を生むために珍重されているだけだ。

今の人工知能研究者は、「人はなぜ少ないヒントでピンと来るのだろう」とか「情報理論の基本に反していてありえない」と真面目に不思議がっている。だがその答えは冒頭で述べた本能と経験と自主性とまとめ力である。オンオフ思想で居るうちは永遠に不可解だろう。真の人工知能に向けての本当の課題はこのアナログ集合を実現する電子回路なり生物回路を如何に実現するかである。

19、非論理の例

本日は、デジタル人工知能には如何にも永遠に出来そうもない、「飛躍のある推論過程」を、事例を挙げて検討してみる。なおこれらの例は、いずれも日常会話から拾ったものであって、人間なら普通に対応できるやり取りである。

・「鳥は飛ぶ」&「ペンギンは鳥である」→「だがペンギンは飛ばない」:

事実に基づいた真実の淡々とした叙述であるが、論理学の三段論法としてはこの推論は偽である。ちなみに真な三段論法なら人工知能もこなせて、答えは「従ってペンギンは飛ぶ」と導かれ、現実の如何に関わらずこちらのみが真になる。後者の形式推論が現実とちぐはぐなのは、「鳥は飛ぶ」が一般論としては認定されているものの、あくまでも蓋然論理つまり一般論であって当然に例外を有するために、形式推論になじまないためである。もちろんここで人工知能のルールを高度化して、1段階上のルールとして「但しペンギンは飛ばない」を噛ませておけば、こちらのルールを優先するので表向きは正しい答えを出してくるが、人と違って「ルールの意味するもの」を洞察することができないので、「ではダチョウならばどうか」と言った問いには一切応用できない。

・「労働の対価としての給料を支払って下さい」→「なんだ、お前は金が欲しくて仕事をしていたのか」:

こう言う理屈に合わない暴論的返答は人工知能には無理だ。こう言うルールを入れておけばあるいは可能かもしれないが、冗談であるという認識は全くないので、法に反して永遠に給料は未払いのままと言う結果になる。そもそも人工知能には「冗談か本気か」の区別もつかない。特に自らこう言う「気の利いた」答えを作ることはできない。

融通とか冗談とかそういう類は人工知能には一切無理だ。そして阿漕は悪いことだが、悪をするにはしばしば善をするよりも知恵が要るということだ。

・「カミオカンデをやったのはオルガノだよな」→「いや、浜松フォトニクスでしょう・・・ああ、水の方ですか、それならオルガノですね。」:

「カミオカンデを作った」という表現を普通に解釈すると、全体設計あるいは心臓部としてのフォトマル(光電子増倍管)を製造したと言う意味に取れるので答えは「浜松フォトニクス」になるが、質問者は裏方側の純水製造の方を話題にしていた訳だ。ここで人なら機転と連想を利かせて「ああ、水のことか」と分かって正しい答えを出し得るが、人工知能や頭の固い人は思いこみが強く応用力が無くまた感情移入もないので、ただただ「浜松フォトニクスです」を無限回繰り返すだけだ。

・「戦後の偉大な政治家の藤山一郎と吉田正の展示を見て来ました」→「それって歌手と作曲家じゃない。あなたが見て来たのは鳩山一郎と吉田茂でしょう」:

人工知能にはルールとして、「藤山一郎や吉田正が政治家だ」などと言うことはおよそ想定していないので、ただ「分かりません」とか「それは良かったですね」などと当たり前すぎるつまらない答えを返してくるだけだ。ここで気が効く人なら、政治家と藤山一郎と言う不完全なヒントを元に連想で、「鳩山一郎ではないか」と気付く。同様に吉田正も吉田茂であると気付く。このような不完全なヒントに対する回答は、意味内容を理解の上でそれに情報付加をして拡張させる能力を要するので、デジタルな人工知能にはおよそ出来ない。

・「わあ、画面が分け分からなくなった」→「いいから右のボタンを押して」:

新米操作員とベテラン指導員のやりとりである。ベテランの方はスキルベースで、該当する瞬間の状況とその対応策について、極めてわずかなヒントから膨大に悟り、かつ何段階もの論理推論をジャンプして一気に答えを正確に教えている。こう言うヒント以上の気付きや論理のジャンプはデジタル人工知能にはできない。もし人工知能の手順をくそまじめに待っていると、仮に正しく出来たとしても多分に手遅れである。

・「マグロが泳ぐう???」→「あ、分かった、この子はマグロを赤くて四角い刺身のことだと思っているのだ」:

この例も、推論した人の背景に膨大な経験とその意味解釈が揃っていないと推論できないことだ。「マグロ&泳ぐ&疑問」から、世の中の子供が往々にして自然を経験していないと言う蓋然法則を援用して、この推論に至る。この推論は蓋然推論だから、絶対に真だとは言えないが、おそらくほぼ大抵真であろう。

・先生が「人の嫌がることを進んでやりましょう」と言ったら、男子生徒がスカートめくりを始めた:

仮に人工知能が人型ロボットに装着されているとして、この笑えないリアクションは大いにあり得ます。人工知能に冗談はあり得ないからです。スカートめくりは人(女子生徒)が嫌がることです。人工知能の行為は先生の指示通りです。この事象が笑えないのは、人だったら「人の嫌がること」が嫌がらせでなく善行であることを、文脈から意味理解できるからです。もちろんこの男子生徒も、文脈が分かった上でとぼけてやっています。

・「こんな問題も出来ない奴は教室からつまみ出すぞ」→「じゃあとりあえず生ビ〜ル1杯、中ジョッキで」:

このやりとりも相手が人工知能なら大いにあり得る。「つまみ出すぞ」を「おつまみを出してあげるよ」と文脈理解した訳で、これはワープロの誤変換と同じ原理だ。答えた生徒の方は正解が分かっている、わざと間違えている。基本的に人工知能は笑いが苦手だ。正確に答えることしかできないからだ。特に出川哲朗のような瞬時の切り返しが苦手だ。ルールに入っていないからであり、お笑いという微妙な心理は読む能力が無いからだ。私が「優秀な人は漫才師になれ」と言うのも、笑いが霊長類の長の究極の能力を象徴的に用いているからだ。機械でもこの例のように結果として人を笑わすことは有るが、あくまでも自分は何で受けているのか理解していない。

・味方の反対は敵でなくて無関心だ:

マザーテレサの言葉だ。これも深い知恵が無いと言えない言葉だ。もちろんこのフレーズをルールとして直に注入すればこのように返すが、その後のフォローや実行は一切続かないし、本当に味方の反対が敵の場合まで一律にこう答えてしまう。一般にことわざは大抵蓋然論理で、文脈に合って言わないと頓珍漢になるが、機械は空気を読めない。典型的なKYだ。

・やれ打つな 蠅が手をする 足をする:

小林一茶の有名な句だが、人工知能はこれに対して何の反応もない。ただ淡々とした事実の描写で、何も命令していないからだ。句意は「蠅が懇願している」と言うことですが、これも入れると「誤謬です」と返してきます。実際に蠅が手足をするのは汚い物を捏ねているからだ。抒情を読むことは機械にはできない。

・小沢一郎はアイヌの子孫だ:

小沢さんが岩手の胆振地方の出身で、人相も縄文人側だという程度の根拠からの連想で、真偽のほどは知りようもない。人工知能は「その言及はルールにありません」と

返してくるだろう。「面白い説ですね」位は返して欲しいのだが、そんな気の利かしを機械に期待する方が無理と言うものだ。

20、民俗学は学問か

私の近所のある地域で、町おこしを目的として「〇〇七福神」を企画した。ところが、七福神の内6体は見つかったものの、その地域に恵比寿様を安置する寺社がどうしても見つからない。青年会一同途方に暮れた。ところがその地域に彫刻に心得のある人が居て、恵比寿様を彫って煙でいぶした上で近所の寺に安置した。これでまあ七体揃った訳で無事に町おこしが始まり、最近では地域外からも巡礼のウォーカーたちが集まるようになっている。

町おこしとしてはこれで目出度し目出度しなのだが、実にこの点に民俗学の学問としての難しさがある。私も以前に「伝承学」と言う記事でヤマトタケル伝説を例に記述したが、伝承や大衆文化、祭りとか言い伝えとか伝統料理とか果ては居酒屋の分布に至るまで、「民族学」とは違う民俗学は、「根拠が如何にも簡単に作れてしまって信ぴょう性に薄い」と言う理由で、現実にはその各地方の民俗的特性を極めて切れ味よく出していて、かつ意外性もあり大変面白いものの、なかなか学問として認知されにくい。「好事家の余興との境界線が明確でない」のだ。

日本民俗学の父に柳田国男が居る。この人は学校で習うほどに有名な人で、代表作の「遠野物語」は出版されてから100年たった今でも読み継がれている。加えて柳田自身これらの業績を元に文化勲章までもらっており、彼の成果は十分すぎるほどだ。ただそれは「日本人の心象を浮き彫りにした」と言う半文学的成果であって、彼自身の評価が高いからと言って柳田民俗学が、たとえ「学」と付いているからと言って、今でも異論なく学問として認定されている訳ではない。

むしろ愛好者による「柳田学」と言う特殊な論法、「研究と信仰の中間的存在」と言う位置づけの方が適切であろう。類似な位置づけに、やはり民俗学を深め作家でもあった折口信夫の「折口学」や、「ユダヤ人と日本人」や「空気の研究」等によって日本人の意思決定に係る特殊な過程を明らかにした山本七平氏による「山本学」もある。そして保守系の学者はこれらも学問と認めていない。現に「ニセ・ユダヤ人と日本人」と言う本まで出ている。これらの現象をどう理解したら良いのであろうか。

ちなみに柳田の後継者の幾人か、例えば和歌森太郎氏は大学に職を得ていて学者と見なされているが、それは彼が柳田の現地踏査やたまたまの聞き取りと言った、学

問と言うより素人の旅行感想文に近いような手法を踏襲せずに、「柳田の著書を文献として客観視した時に学術的に何が言えるか」の方向に、つまり柳田の生きた部分を学問的手続きで殺すことにより成り立ったことなのである。和歌森に於いて民俗学は、多分に他人事の「客観的な」人間味の薄い解説になっている。

しかしこれら「〇〇学」が、学問でなくても熱烈な支持者が常に居ると言うことは、学問的手続きは人類智や人の好奇心の欲するところ、魂の躍動があるところを決してカバーしていないこと、そして人々が真に本当に求めているのはもっと他の血の通ったところにあるということを示している。学会が柳田学を学問として認められないのは仕方ないが、結果として学問は自分で自分の首を絞めているのだ。一言で言えば人々は学問など求めていないし、学者は「材料だけ集めて料理は作らない下請け奴隷」のようなものなのである。

もっとも逆に柳田学が学問として認定されてしまうと、束縛の方が多すぎて大して面白い結果は出てこないだろう。例えば、「遠野物語の伝奇性の基層にアイヌ民族の素朴な魂が存在しているのではないか」と言った大胆な仮説の方がよほど面白い。そして再びこの仮説の証明は証拠が無さ過ぎて、学問以外の柳田学的な合理的推量を経ることになる。

ところで最近では学問も多少は「自ら自分の首を閉めている」窮屈さに気付いたのか、全員賛成ではないものの例えば、ヨン様の「冬のソナタ」のように歴史的評価が定まっていなような流行作品の構造を研究して朝鮮族のマインドに迫ろうとか、あるいはサブカルチャーや夏コミのような自費出版同人誌等のように一過性で流動的な物も、「それなりに若者たちの行動原理の反映である」として研究対象にしようと言う傾向にはなっている。ただ依然として他人事的な解説が多い。他人事でないと学問にならないのだ。そんな回りくどいことをしている位なら、自分で参加した方がよほど楽しいであろうに。

このように学問はその客観性と言う鉄板から抜け出せないために、常に自分を枠外に置いてあたかも他人事のような語りをしないと異端審問されてしまう。何とも心寒いことである。そうかと言ってSFではこれも科学をネタに使うだけで鼻から「科学ではありません」と宣言していて、上記した柳田学や山本学とは明らかに異なった立場にある。ここで私は、これらの「学」が共通して持つポジション、学問ほど憶病にならずに、またSF程自分をピエロにせず、もっと堂々と事実に近い所の魂の躍動を伝える新分野の勃興を期待したい。

私は最近縁があって、日本ユーラシアクラブと言うNPOが発行した、「岩に刻まれた古代美術—アムール川の少数民族」と言う本を読んだ。ゲリラ本らしくて市販はされていない。また別のところで、満州映画がかつて製作した「内モンゴルの人々」と言う記録映画を見た。そこにはいずれも文字による記録が少ないし移住性のために遺跡も少ない北方少数民族の、生きた姿が生き生きと叙述されていて久々に感動を覚えた。もちろんこれらは事実の一端に過ぎないだろうし、無理のない想像も入っている。その意味で学問ではない。だがこれらの方がよっぽど魂が伝わってくる。学問と魂の躍動と、どちらが人の宝であろうか。

「柳田学は学問ではない、むしろ酒場放浪記とか街歩き日記みたいなものだ、だから『学』とか付けるな」、こういう人に私は反論したい、「それだからこそ私は柳田学が好きなのです、あなたは魂の抜かれた学問的手続きの小役人でもやっていなさい。」

21、ウインドウズ10購入後3週間目

先日にウインドウズ10のパソコン(ダイナブック)を買ってから、3週間が経ちました。ひたすらに基本設定をして今徐々に実用する段階に移行しているのですが、この最初の3週間に設定で特に苦労した点を列挙しておきます。ちなみに私は前のパソコンがビスタだったので、OSは3段跳びでした。また、私のパソコンスキルはあくまでもエンドユーザーの一人と言う位置づけで、全くの初心者ではないものの特に詳しいとか知り尽くしているわけではありません。私が買った量販店には「1年に50問まで問い合わせができる」と言う有料のサービスがあったので、これに申し込みました。

1月经ってみて、「50問に達する人は少ない」と言う話だったのですが、私の場合これまでに都合5問を問い合わせました。そして正解はいずれも、私のスキルではおよそ思いもつかない方法ばかりでした。ですから、「5問しか聞いていない」がお値打ちかどうかは別にして、このサービスを申し込んでいなかったら多分に立ち往生していました。以下にその5つの問いと教えてもらった解決法を列挙しておきます。

<問1>ワイファイルータのつなぎ方が分からない。

電子マニュアルには専用のアイコンがあるがごとくに書いてあったのですが、そのアイコンがどこにも見つかりませんでした。

<解1>画面左下のスタートボタンを押すとスタート画面が上がってくるが、そのうちの「設定」を押すと設定画面が出てくる。その中に「ネットワークとインターネット」と言う項目があるのでこれを選ぶと、現状の環境で電波が届いているワイファイルータ名

が羅列される。その中から自分のルータに記された自分のIDを選んで、やはり記されたパスワードを入れると繋がる。

<問2> ブラウザーの開け方が分からない。

実は画面トップのアイコンから電子マニュアルを開いたときに、ウインドウズ10標準のブラウザーである「エッジ」が既に開いていたのですが、それに気づきませんでした。

<解2> ウインドウズ10はインターネット・エクスプローラーの進化形である「エッジ」が標準であるが、一度開けばアイコントレーにエッジのアイコンがピン止めされるので、以後はそれをクリックすればよい。使い勝手（タブの開き方等）は従来のIEと同様です。

<問3> ローカルプリンターを用いた画像スキャンの仕方

ビスタの時には「ウインドウズ・フォトギャラリー」用いて画像の取り込みができたのですが、10にはフォトギャラリーと言うアプリはありません。また、ネット検索をすると「とあるアプリでできる」とあったのですが、私のパソコンにはそのアプリが見つかりませんでした。

<解3> 画面左下のスタートボタンを右クリックして出てきたポップアップから「コントロールパネル」を表示し、その中から「ハードウェアとサウンド」の下「デバイスとプリンターの表示」をクリックする。事前にプリンターを接続しておくと、そのプリンターに合ったドライバーソフトが既に選択されていて、一覧の中に画像表示されてくる。その画像をクリックすると、そのプリンターに関する専用ウインドウが表示されるので、その中から「写真や文書の読み込み」をクリックすると、フォトギャラリーと同じスキャン画面が出てくる。なお、この画面は頻度多く使うので、アイコンを画面トップに作っておくと便利です。

なお、スキャンはこれで良いのですが、フォトギャラリーがないと既に取り込んだ画像の明るさやコントラストの調整ができません。これはスタートボタンをクリックして、その中の「すべてのアプリ」から「フォト」と言うアプリを選ぶと、これで行えます。

<問4> 自分で作った（例えばMSワードやPDFメーカー等で）ファイルを右クリックで「オプション」を開け、さらに「セキュリティ」タブを開くと、自分の名前とメールアドレスがセットで表示される。このままでホームページの素材としてアップしたときに、不特定多数に私の本名とメールアドレスをセットで公表していることにならないか（以前のOSバージョンではそういうことがあった）。

<解4> その表示は自分のパソコン内のみの表示であって、仮に他の人がそのファイルをダウンロードしても、その人の名前とアドレスが表示されるだけである。

これ、試しに娘のパソコンでやってみたら、その通りで安心しました。

＜問5＞セキュリティソフトの会社のメールに、「これからはルータのセキュリティにも注意すべきだ」とあったので、自分でできるところまでやってみた。具体的には先ずスタートボタンを右クリックして「ファイル名を指定して実行」を選択する。そこに「MSCONFIG」（小文字）と入れてこれを開き、「デフォルト・ゲートウェイ」で指定されたアドレスを用いてブラウザでページを開くとパスワード設定画面が出る。当初は空である。そこで空だったパスワードを設定した。そうしたら、その後そのルータを作った会社のホームページが出てきたが、それをそれ以上どうしたら良いのかわからなかったの、問い合わせた。

＜解5＞それ以上なにもしないのが良い。パスワードさえ設定すればルータは乗っ取られないし改造されないの、他の項目はメーカーがセットした通りがベストだ。設定したパスワードは忘却すると面倒なので、どこかにメモをしておいてくべきだ。

以上が現状のサポートへの問い合わせの内容とその回答です。これ以外にもソフト特有の項目はいくつか、そのソフトのカスタマーサポートに問い合わせました（例によって長く待たされます）。ここに記録するのがふさわしい例として、トレンドマイクロのウイルスバスターの、以前のパソコンに付いていた権利を新しいパソコンに移し替えるのに手間がかかった。私はエンジニアと電話で交信しながらやったが、やり終えてみると、

①トレンドマイクロのホームページでログインする

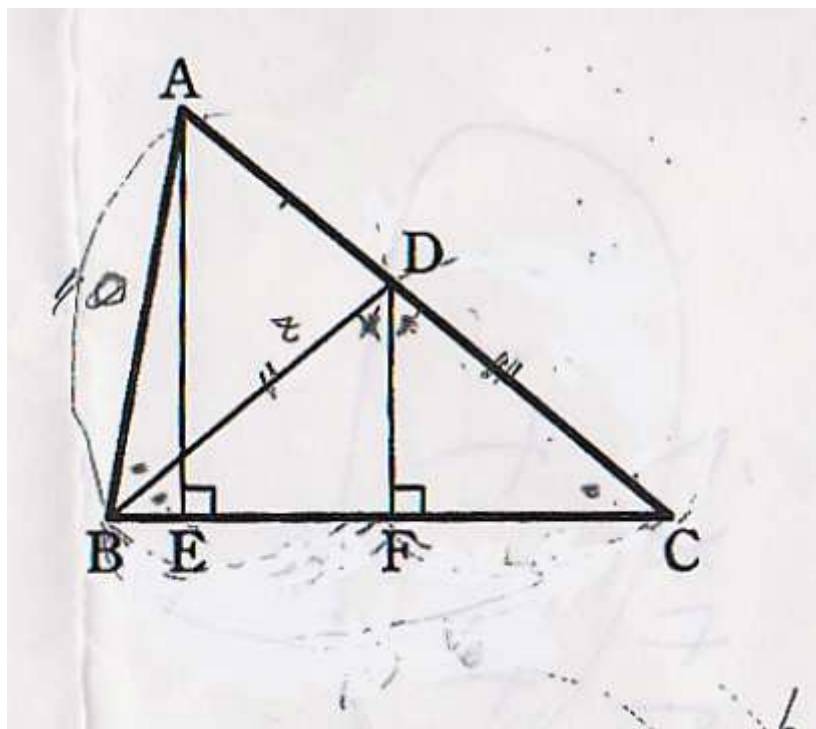
https://account.trendmicro.com/my_account/signin?language=JA-JP

②開いたページには「製品」タブで現状の保護状況が示されているので、その「お問い合わせ先」タブを開いてそのページの一番下にある「ウイルスバスターサポートウェブ」ボタンをクリックし、それで開いたページから「無料バージョンアップ」を選び、そこで更に開いたページの上の方の「自分でやってみる」をクリックしてあとは表示されるところにやっていくことで、次回からは自力でできるようにも思えました。

これ以外にも、「ネット検索でやり方が分かった」という場面は山ほどありました。但しウィンドウズ10が供用開始になってからまだ半年なので、知恵袋等の分かりやすいQ&Aはまだ充実していないように思えます。

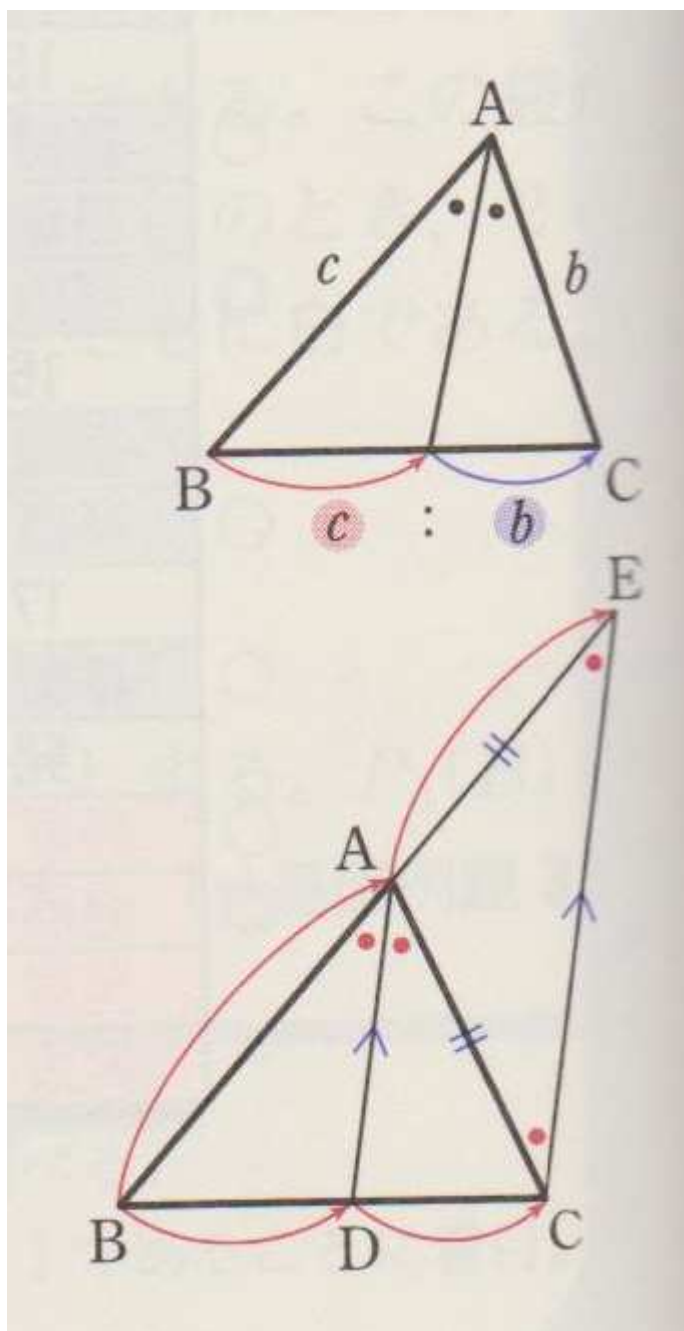
本日は以上です。

22、幾何的不変量



上の図は高校1年レベルの幾何の問題である。設定として、まず三角形ABCがあり、 $\angle B = 2\angle C$ 、線BDは $\angle B$ の二等分線、点EとFは点A及びDから辺BCへの垂線で、辺ABが10cmの時に辺EFの長さを求めよと言う問題だ。問題のレベルは中の上と言ったところか。

この問題の解決のカギは、「三角形の角の二等分線は対辺を、角を形成する両辺の比に内分する」と言う、名もない「定理」である。下の図の上の三角形で、「青 b:赤 c= 辺 b:辺 c」、という訳だ。一般に三角形の角と辺の関係は三角関数(sin, cos)で表現されて複雑なところ、二等分の場合に限り比例が成り立つというのがこの定理の面白いところである。ただ、この定理の拡張性の無さや応用問題の少なさでは、定理というよりもむしろ補題である。最近の教科書ではことさらに記載があるが、私の若いころはこの関係は補題とすら取り上げられていなかった。



一般に三角形と言ってもそんなにネタがあるわけではない。錯角や相似比例関係に還元される法則がほとんどであって、その意味ではワンパターンなのであるが、この「定理」もご多聞にもれず、相似関係の単なる目くらまし（イリュージョン）に過ぎない。それは、今の図の下の絵のように補助線を入れてみれば一目瞭然である。まあ、補助線がないと一目瞭然でないからことさらに「定理」として位置づけられるということで、定理がすごいのではなく人の能力が目くらましに弱いだけである。

冒頭の問題だがこの定理を使うと、

$EF:FC=AD:DC=AB:BC=AB:2FC$ となって、結局 $EF=1/2AB$ であるから、 $EF=5$ と答えが出る。まあ、どこの予備校の先生が考えた問題か知らないが、よく練られた問題だ。名もない先生の作ながら良問と言ってよい。

と言うか、ここからが今日の本題なのだが、この問題は発明した先生が思っていたよりもはるかに優れモノなのである。どういうことかと言うと、上記の問題で $\angle B$ の角度に具体的な指定がない。つまりこの角が何度であっても、つぶれていようと突っ立っていようと、辺 EF の長さは不変で常に 5cm なのだ。つまりこれは、意外なところに潜む不変量の発見なのである。

理学部に籍を置いた人には分かると思うが、数学や理論物理学の主要な目標の少なくともその1つは、不変量の発見なのだ。よく知られた例を挙げれば「三角形の3つの角の和は 180° 」、これはよく役に立つ不変量であり、多くの問題がここに帰される。あるいは「運動エネルギーと位置エネルギーの和である全エネルギーは一定である」、これもあらゆる力学や工学の大基礎となっている重要な定理である。こういう定理があるから我々はより複雑な状況を考察できる。ありがたく便利な基礎台なのだ。

もっと専門的になると、ゲージ不変性とかサイバーグ・ウィッテン不変量とか、いずれも理論物理や数理科学のビーコンであり、こういうものを発見するために世界中のベストアンドブライテストたちは日夜しのぎを削り精進しているのだ。ただ不変量と言ってもこれほど複雑な理論の世界になると、ある意味レアと言うかマニアックすぎて現実には使えない。つまり理論が高度になればなるほど、不変量は実はその対象のごく一部しか解明していない。本当の実態解明はむしろずっと泥臭いのだ。そして不変量、それは美しくはあるものの、実は名誉だけの絵空事に近い。「学問のための学問」の趣もある。

特に義務教育や学校の授業を聞いていると、いかにも人類はすべてを知り尽くしたかの感を持ってしまいが、実際は逆で、運よく知りえたことのみ教授しているのが本当の姿だ。例えば物の重さは単なる和だから問題を作りやすく、槌（てこ）とか滑車とか運動量とか力積とか練習問題にあふれているが、これが物の体積となると複雑で単なる和でないために練習問題はほとんどなく光も当てられていない。この「知の矛盾」の窮まったものが不変量である。

ただ今回の不変量は初頭幾何に係るものであり、分野としては初歩的だから言及の

価値はある。「三角形の形によらず線EFの長さは一定」、この不変量がどれだけ役に立つかは分からないが、発見者はこの不変量を発見したというだけで自分の名前を学問史に残せる。この問題を考えた人が平川という人なら、「平川の補題」とか「平川の不変量」とか呼ばれ得る訳だ。研究者の冥利であり名誉なこと著しい。ところがこの問題を考案した人の現実の「考案料」は、おそらく所属する塾で一時金5万円くらいだろう。なんとも欲のない人だ。

23、恐怖の二者択一

<第1章>

私はフォークグループ「かぐや姫」の「神田川」が好きで、今でも何気に良く口にします。あの、貧しいながらもけなげに生きて行く若いカップルには、抒情があります。それに若いころは同棲に対する憧れもありました。ちなみに本物の神田川は名前とは違って神田付近だけでなく東京近郊を東西に長く流れているので、ウォーキングでも思わぬところでひょっこりと出くわしたりして、その意外性にも親しみを感じます。

昨日その「神田川」の「年に一度の贅沢だけどお酒もちよっぴり飲んだわね」という下りを、風呂上がりなどにいつものごとく口ずさんでいて、ふとあることに気づいて思わず身震いしました。「お酒を飲めるのがたった年に1回で、しかもそれも少量で更にそれが贅沢だ～～」、これは一体どういう世界なのでしょう。頭がホワイトアウトしました。私は毎晩、その日の仕上げにコップ1杯のお酒を頂くのを楽しみに、人生をやっています。この自宅での「寝る前の1杯高々150円」のお陰で、「今日も充実した良い日だった」と気持ち良く休めるのです。それがまるっきりお取り上げになって「無いよ」とは、これは一体どんなに悲惨な人生なのか、もうめまいがしてきました。

ところで話は変わりますが、私には従来から死ぬほど嫌いなことがありました。これほど嫌いなことはないですし、これを私ほど嫌がる人も居ないでしょう。仕事、労働です。もう36年も社蓄をやりました。天台宗の千日回行10回分に相当していて、私なんかもう大大大阿闍梨です。とにかく死ぬほど嫌で、「労働するくらいなら近くの川に飛び込んで死ぬ」と固く誓った社畜生活、社畜程でなくてもバイトのガードマンだろうがマンション駐在人だろうが、とにかく働くという行為が死ぬほど嫌いで、もう金輪際一切願ひ下げのコンコンチキなのです。

と、ここで恐怖の二者択一が来ました。もし、「酒を辞めるか仕事をするか、どうしてもどっちか選べ」と問題設定されたら、私は一体どうしたら良いのでしょうか。「仕事かお酒取り上げか必ずどちらかを選べ」とは、こんな残酷な刑がおよそ世の中に存在したと

は……。でもこれは何らかの理由で、例えば先日も危なかったのですが詐欺に遭ったりとか、うっかり火を出してしまったりとかして蓄えが底をつけば、日本は自由主義国家で自己責任経済ですから、こういう選択は現実化します。決して絵空事ではありません。

これはあたかも、「カレー味のウンチとウンチ味のカレーとどちらか選べ」と迫る程に無慈悲な選択です。しかも笑いごとでない現実性がある。私はその日からしばらくの間、頭が変になりそうで夜もおちおち眠れませんでした。もちろん今だって答えなんか出ていません。ただ「問題の存在そのものを忘れよう」と言う日々の努力が、少し実って来たと言う程度です。まあせいぜい、「今日は酒にあり付けた、明日は分からないけど、神様とにかくありがとう」、こう感謝して日々を過ごしているということです。もう滅相もないです。「ひええお代官様お目こぼしを」とか、そう言う感じです。もう人としての尊厳とかかなぐり捨てちゃっている自分が、そこには居ます。

<第2章>

これほどでもないにしろやはり恐怖の二者択一に、「おとなしく社員をしてぼられるか、あるいは反抗してでも自分の時間と自由を守るか」と言う二者択一もありました。選択の主体は自分ですが、どちらの選択もそれなりに大変なのは明らかです。私は周囲をできるだけごまかして、「最低限の付き合いで時間の垂れ流しを防ぐ」と言うやり方を選択してきました。この話の対象は主として夜の宴会とか昼の連れ飯のことです。

都心にオフィスのある人は良く、「せっかく会社の定期券で都心に来たのだから」と言う理由で、豪華なランチやディナーを食する人が結構多いです。サラリーマンの小作人的な知恵でしょう。ただ私は嫌だったのです。仮に時給1500円として、ちょっとしたレストランでエスニックとかの珍しいランチを食うと、それで1時間の働きがパーになります。つまりその日の人生が1時間短かったのと同じになってしまいます。その位なら、「昼飯は要らないから都合2時間早く帰してよ」と言いたかったです。エスニックは好きですがこれでその日が終わるわけでもない、めでたさは感じません。

更に、付き合いとかノミネーションとか称して、行きたくもない居酒屋に連れていかれて、ハイ4500円也。ふざけるのも程度があるのではないか。これではこの丸1日が無かった、寿命が1日縮まったのと同じでしょう。会社も1銭も払わないくせに、「時間外のコミュニケーションは大事です」などとおっしゃる。しかも声をかけてくる先輩たちも、「君も仲間外れにしていないよ」と言う親切心だったりする。そして仕方なく付いていけば、会話は仕事や同僚社員の話ばかりだ、拘束時間外なのに。気が変になりそうだ。

人を小馬鹿にするのもたいがいにして欲しい。人の時間を何だと思っているのだろう、先輩の付属物じゃないのだよ。時間を返して下さい。時間泥棒は殺人と同じです。結局この世の大多数は、使命感も無く刹那的に時間を垂れ流していて「その瞬間さえ楽しければよい」ということなのでしょう。そう言う人たちの気持ちが36年間も理解できなかった私のほうが、むしろバカだったのかもしれない。

24、安倍首相と明治維新

一度死んで蘇った安倍首相、いろいろな批判はもちろんあるが、手間がかかる割に最低限しか保証しない民主主義が選んだ首相としては、考えられない程ブレがなくて力強い。この見解に反論があるなら、頓珍漢な森とかズレまくりのルーピー鳩山等と比べてみれば分かる。民主主義が本来選べるのは、せいぜいあの程度なのだ。しかも鳩山なんか毛並みが良くてかつ成績優秀、帝王教育も受けているにもかかわらずにあのざまである。

その安倍さんの目指す方向、目先のことではなく遠くまで見据えた方向性、それは「明治維新を見ると安倍さんが見えてくる」と私は感じている。日本はアジアで唯一、植民地にならなかった国である。これは世界規模で見ても奇跡と言ってよい。もちろん自分で勝ち得たものだが、日清日露の両大戦で勝利するなど、およそ考えられない大博打であり偉業であった。

そしてその大元の原動力はと言うと、以下のような日本固有の国民性が挙がってくる。①習合の国の面目躍如たる発想の大胆かつ機敏な転換、②古(いにしえ)からの伝統である稲作民族特有の勤勉さと優秀さ、③寺子屋や藩校に代表される識字率やリテラシーの高さ、④他人を思いやる懐の深い心の美徳と愛国心、⑤万世一系の天皇制による拠り所とまとまりやすさ、⑥意味なくイデオロギーに踊らされず本質を見抜く中庸さ等である。

そしてこれらの要因の総合的な結果として、日本の国力はわずか数十年で、欧米に伍するほどに成長した。ここで国力とは軍事力、経済力、外交力、そして人間力等である。今から数十年前の昭和末期から今日までの遅々とした歩みなど、およそ比較にならない。明治維新の元勳たち、西郷隆盛、大久保利通、山形有朋、伊藤博文、東郷平八郎、乃木希典等々、みな光っている。そしてこの維新を牽引したのが薩摩と長州であり、安倍さんは長州人としてそのDNAを受け継いでいる。

その安倍さんが今目指していること、それは一言で言えば今の時代に明治維新の手法を応用しこれを再現して、今の動脈硬化を起こした老人国日本を再生しようという試みであると、私には見える。そしてこの文脈に沿うと、安倍さんの打つ手がすべて理解できる。

明治維新に倣うとまず取り組むべきは、鎖国から開国への大転換である。そして今の時代において開国とは、世界標準を喜んで受け入れることである。税制や法制、更には国防や世界貢献に至るまで、基本は世界標準に則ることである。そのためには日本独自の従来慣行が特に不便でなくても廃止されることをいとわない。そして世界標準を受け入れるときに単に受け身ではつまらないので、これを梃(てこ)にして日本がむしろ海外に経済進出し国際影響力を高める戦略をとる。

次に、現代において国力とは第一義的には経済力である。そこで安倍さんは「第二の維新」に向けて経済力を中心とした国力の増強を目指して、多くの手を打ってきている。引き続き世界の一流国であり大国であり続けるためだ。具体的には法人減税、円相場の適正化とそれによる株価の上昇、税率引き上げによる国庫歳入の増加とひいては慢性赤字の減少などだ。一億層活躍社会、女性の社会進出促進や定年引き上げも、社会費用の減少と労働人口の単純増加による経済力の向上と言う一石二鳥を狙ったものである。理工系の強化策も、付加価値の創造による経済力の強化に国民をシフトするための策である。

個々の手段には限界はあるだろうが、おそらく今のアベノミクス以上の手段はなく、これでだめならもう日本は原理的に誰がやってもダメだろう。そして明治維新に更に倣うと、これらの直接手段だけでなく国民をまとめかつ精神力を高めるという間接対策も、直接対策に負けずに重要であると分かる。そしてこちらの方もぬかりなく手を打っている。具体的には国を愛する心の醸成、自衛隊と国防力の強化、郷土を愛する心を盛り込んだ教育方針などだ。

ここで注意と言うか注目すべき点は、明治維新においても、仕方ないとは言え日本固有の文化や伝統で一時的に失ったものもあったということだ。例えば士農工商の身分制度の廃止、武士道を担う武士階級の廃止、キリスト教の許容、藩閥政治の廃止、儒教に基づく人格形成教育の取りやめ等だ。これらは下手をすると日本人がまるで変質してしまう恐れもあった。我々が今想像する以上の博打的な転換であったのだ。

ところが結果的には幸いに、これらの内の大切な要素は後に取り返せている。その意味で、いま日本が国際標準化したとして失う可能性のあるものを列挙すると、思いや

りの心や武士道、おもてなしや自然を愛する心、年功序列の敬老精神、貧富の差の少ない福祉精神、世界に希な安全社会等である。これらはあるいは一時は減少するだろうが、明治維新の先例に学ぶならば後になって必要相当分を取り返せるだろう。

ところで卓越した評論家の大前研一さんは、アベノミクスをぼろくそに言っている。曰く、「日本が低欲望社会に変質した」と言う根本変化を見逃しているので、いくらアベクロバズーカを打っても効かないどころかかえって傷口を広げるだけだ。この批判には当たっているが、安倍さんがこの国民性の変化に気づいていないとは思えない。だからこそ企業を先兵に積極的に海外進出を促して、日本ではなく世界で稼ぐように持っていこうとしているわけだ。

2年後の西暦2018年、これは明治維新後150年の記念すべき節目である。そして安倍さんはこの年まで政権を担当することに意欲的である。やはり自分を明治の元勳に重ねているのだ。決して尊大だとか身の程知らずなどと思わない。願わくはこの年までに、彼が打った諸手段の兆しが見えていれば良いのだが。

2015. 12. 28